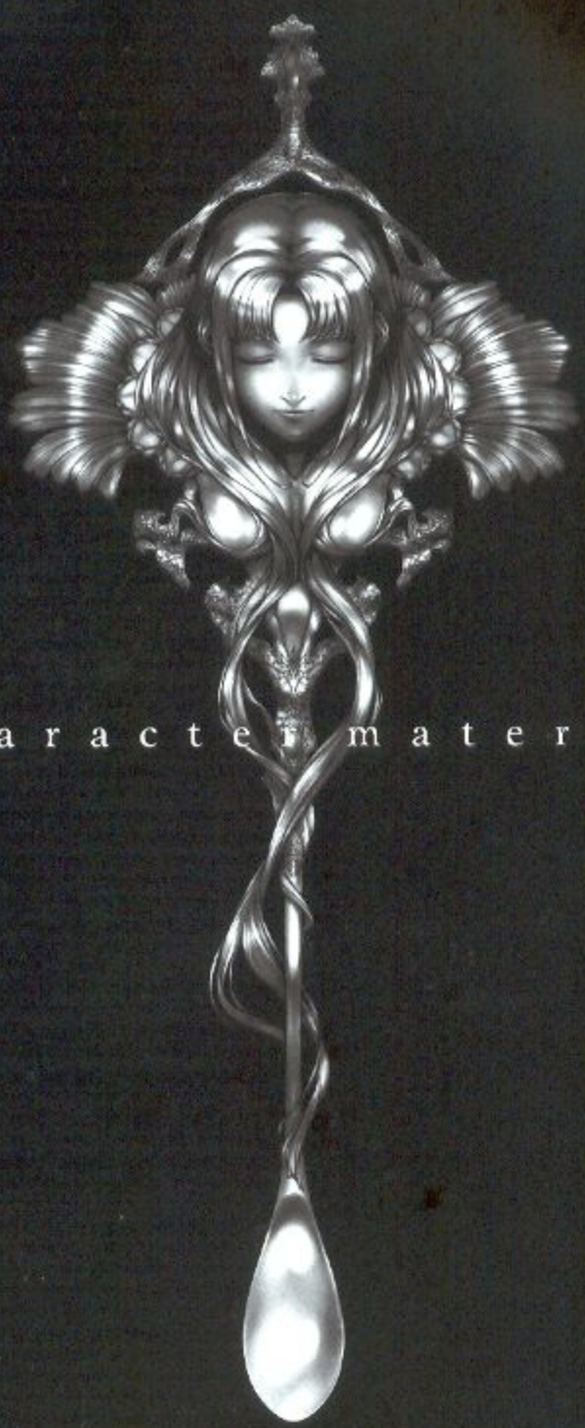
Character material



Character material

It talks about the previous state for tens of years.

Infinite form, or legend, or the one that it is not possible to preserve it.
Or the way of story, or arrangement, or the one not forgotten.

The name is "_____"
It doesn't have the name.
If forced to say.
Dictionary, dictionary, material, code, record, memory, sign, and
sign.
The fragment of the fragment is sprinkled.

K. In short, tens of years or the following current stories are told.

material

Character

Character material

キャラクター・マテリアルにようこそ。

本書はＴＹＰＥ-ＭＯＯＮに関わりのある物語から未来を示すもの、もしくは突発的な空想話を集めた、記念碑的な読本である。

辞典というほど広くはなく、

資料というほど深くはない。

これらの断片がＴＹＰＥ-ＭＯＯＮの次回作を暗示している事もない。

これは現実化しない雑談であり、同時に、これまでの物語が残した痕跡でもある。

それでは。

本書がＴＹＰＥ-ＭＯＯＮを楽しんでくれた貴方にとって、いっときの休息になる事を。

Character material

Contents

序文	06
目次	07
蒼崎青子	08
久遠寺有珠	10
旧セイバー＆旧主人公	12
バルトメロイ・ローレライ	16
Ｐｒｅｌｕｄｅ Ⅰ	18
蒼崎橙子	24
洗脳探偵	26
少女	28
ゴドー	29
斬撃皇帝	30
白き月姫ファンタズムーン	32
ミスター・ダウン	34
Ｐｒｅｌｕｄｅ Ⅱ	36
ロード・エルメロイⅡ世	40
モードレッド	42
カレイドルビー・シュバインシュタイン	44
アインツさん家のイリヤさん。	45
三枝由紀香	46
帽子の少女	47
魔法のお手伝いさんマジカルアンバー	48
石杖アリカ	50
迦遼カイエ	51
ＤＤＤラフ	52
干将莫耶オーバーエッジ	53
グランスルグ・ブラックモア	54
メレム・ソロモン	56
四大魔獣	58
Ｐｒｅｌｕｄｅ Ⅲ	66
ＯＲＴ	70
有間都古	72
パンダ師匠	73
各種ラフ	74
キャラクターデザイナーズコメント	77
奥付	78

Introduction

蒼崎青子

現代に生きる魔法使い。

孤高で、不器用で、けれど自由な、わりかしどこにでもいる十六歳の女の子。

魔術師としての人生をあっさり受け入れながらも、まっとうな人間としての生活も愛していける強い人間。

同居人曰く、天然である事を自覚していない秀才、だとか。

魔術を習い始めたばかりなので腕前は半人前以下。

目下、友人であり共犯者である久遠寺有珠の指導のもと、マイペースに成長中。

十六歳にして街の霊脈管理を任され、以後、ちょこちょこと現れる外敵を迎撃する事に。忙しい毎日だが、文句を言いつつ楽しんでいるようだ。

天然故か、それともそのあたりがアレなのか。

怪物と呼ばれる祖父を特別恐れておらず、仮にも魔法を汲み上げた大師父を“偏屈で長生きしているダメじじい”ぐらいにしか思っていない。

ある時期までは魔術のみによるスタイルに重きを置いていたが、新しい同居人が転がり込んできた後は格闘技に嵌り、白兵戦を前提とした魔術スタイルに切り替わる事になる。

Explanation

蒼崎家の事情

魔術協会から異端とされてきた魔導の名門。日本でも有数の霊芯霊脈を持つ土地の管理者。

青子の祖父らしき人物は秘法を掘り当てた『魔法使い』で、蒼崎の後継者というのは魔法使いの後継者である事を示す。

しかし、その偉大な人物も子供・弟子には恵まれなかった。蒼崎の人間は年々魔術回路が失われており、青子の両親にいたってはほぼ無し。名門・蒼崎の歴史は今代で終わると思われたのだが、その両親は一人の神童を授かった。

ゼロからの反動か、はたまた祖父の思惑通りか

歴代の蒼崎の中でもトップクラスの魔術回路数と逸脱性を持つ少女が生まれ、彼女は即座に蒼崎の後継者として教育を受けることになる。

それが蒼崎青子――の、二歳年上の姉、蒼崎橙子である。

青子は魔術回路こそあるものの魔術世界では平凡な性能として生を受け、魔術とは無関係に、温かな両親に愛されて成長していく。

『ラッキー！　うちのめんどくさい所は全部姉貴に押しつけていいってワケねー』

なんてノリで日常生活を謳歌していた青子だが、十六歳の誕生日に突如

『んー、やっぱ蒼崎の後継者は青子にする』

と問答無用で魔術師の世界に引きずり込まれ、魔術師見習いとして久遠寺の家に下働きとして修行に出される事に。

以上が『魔法使いの夜』が始まる、ちょっと前の話である。

Source

出典／魔法使いの夜（未発表）

三人の主人公による洋館同居もの。

複数の人間が洋館に住む、という状況は月姫に。

現代に生きる魔術師の戦い、という方向性はFateに受け継がれた。

といってもどちらもエッセンス程度の継承で、魔法使いの女の子×２＋男主人公による雑居時代　というジュヴナイルな基本骨子は譲ってはいないらしい。

ＴＹＰＥ－ＭＯＯＮに見られる、主人公的ヒロインの原形。黒桐鮮花、遠野秋葉、遠坂凛の原液。

月姫で登場する青子は彼女が『世界の主役』だった頃から数年後の、先輩・導き手としての姿。ツンデレキャラは、いつしか少年にとってお姉さん的憧れキャラに昇華するのであった。ああ、いい話ですね。

天才のように思われているが、あんまり使い勝手の良くないチャンネルが一つあるだけで、その他は平均的な魔術師と言える。

Alice Kuonji

Introduction

久遠寺有珠

現代に隠れ住む魔術師。魔女。永遠の令嬢。

孤独で、束縛され、頑なに誇りを守る、時代に取り残された少女。

人間的な感情が乏しく、魔術師としての生き方を絶対としている。日常生活はあくまで"正体を隠して魔術を行う"のが魔女としての在り方だから続けているにすぎない。

青子の友人。青子にとっては魔術の先生にして相棒……だが、有珠にとっての青子も、同じような立ち位置のようだ。

生まれる前から魔女である事を義務づけられていた為、十六歳にして魔術師として完成している。

青子は平均的な高校に通っているが、アリスはお嬢様学園に通っている。ちなみに三人目の同居人は青子と同じ学校なのだが、その件については本人もよく分からない感情があるとかないとか。

基本的には人間嫌い。青子とは立場上仕方なく関わりを持ち、いつのまにか唯一の友人になっていた。

街に棲む魔術師として青子と共に外敵を撃退するが、基本的には父の形見である久遠寺の別荘（青子たちが同居している洋館）に閉じこもり、あまり外には出たがらない。

童話をモチーフにした呪術、薬学を得意とするワンダーランド系の魔女。

Explanation

久遠寺の事情

久遠寺はもともと魔術師の家系ではない。魔術師の血を持っていたのは有珠の母である。

資産家である久遠寺の長男は留学先で一人の魔女と出会った。

彼は彼女を愛し、彼女もその求愛を戸惑いながらも受け入れていたが、同時に恐れもあった。どんなに祝福された結婚でも、生まれてくる娘は魔女だ。彼女がそうであったように、魔女の子供は例外なく一族の血と歴史を受け継ぐ宿命を持っている。

魔女にとって父となる男性は、情を移してはならないもの。お互いを愛すれば愛するほど結末は不幸になる。それを承知した上で久遠寺の長男は彼女を娶り、日本に戻って幸せな家庭を築いた。

が、有珠の出産後、母は役目を終えたように死去。

父は周囲の反対に耐えながらも娘を深く愛し、数年後に他界。一人になった有珠は両親と暮らした洋館だけを相続し、母と同じように魔女として生きる道を選ぶのだった。

また、蒼崎とは母親が日本に帰化する際に関係を持った。

有珠と橙子は十年以上の付き合いで、青子とはまだ一年だけの共同生活にすぎない。

有珠にとって青子は友人で、橙子は良き理解者といったところ。どちらとも仲がよいのだが、蒼崎姉妹の殺し合いのような姉妹喧嘩を止める気はないようだ。

Source

出典／魔法使いの夜（未発表）

お城に自分から閉じこめられたお姫さまの話。三人の同居もの。

有珠は人間的にも性能的にも達観者なので一番強いが、在り方として一番弱くもある。

一見青子と同じ"現代の魔術師"に見えて、実は真逆の位置付けの存在。両親の唯一の形見である洋館に執着している。わりと病んデレ、自傷系。

青子は歳を取るが、アリスは歳を取る事ができない。

大切な思い出である洋館に転がり込んだ三人目の同居人を徹底的に無視し、一日でも早く出て行ってもらおうとしていたのだが――

Introduction

旧セイバー&旧主人公

第七階位の新米魔術師・沙条綾香は聖杯戦争と呼ばれる魔術師同士の戦いに巻き込まれ、騒動の末に第一階位のサーヴァント・セイバーを召喚し、マスターとして夜を駆ける事となる――

といったお馴染みかつ捻りのない出だしから始まる、もう一つのＦａｔｅのメインキャラクター。

勝ち気で賢く、どことなく厭世的で世捨て人的な綾香と、そんな少女の背伸びっぷりを微笑ましくもシニカルに見守るセイバー、というカップリングだった。（Fate/stay nightにおける、遠坂凛とアーチャーのコンビを想像して頂ければ分かりやすい）

最弱のマスターが最強のサーヴァントを呼び出す、というのが出だしのキーワードだったようだ。

当時の伝奇小説の流行に従って、始めと終わりだけ決め、あとはひたすら思いつくまま話を続けていく、というスタイルだったのが微笑ましい。

Explanation

旧ＦａｔｅとＦａｔｅの相違点

旧Ｆａｔｅからキャラクター造形が変わっていないのはランサー、アサシン、キャスター、バーサーカー、アーチャー（ギルガメッシュ）、エセ神父と撲殺教師の七名。

ランサーのマスターは綾香のライバルで某ルヴィア嬢っぽいお嬢様であり、

ライダー（テセウス）のマスターは病院で不治の病に苦しんだ末にとっくに他界なされた女性だったり、

バーサーカーのマスターは伝奇ものに相応しい、倒した相手は即レイ×な外道牧師だっり、

アーチャーは初登場時から堂々とギルガメッシュとして登場したり、アサシンは今も昔も山門で「――アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」などと名乗りを上げる伊達男だった。

余談だが、エセ神父と撲殺教師はお互い孤児院の出で旧知の間柄でした。爆笑。

Source

出典／原作版Ｆａｔｅ（未発表）

製作時期は魔法使いの夜よりさらに前になる為、“ＴＭにおける現代の魔術師もの”の雛形と言える。たんに魔界転生がやりたかっただけ、という話も。

とは言うものの、この素直になれない天才少女と年上の青年、という関係は好きだったらしく、物語がFate/stay nightになっても凛とアーチャーという形で復活を見た。

Ayaka Sajyou

Introduction

沙条綾香

眼鏡っ子である。

何かとコンプレックスの集合体だった綾香は、いつも色んなものにツンツンドキドキしている。他人を寄せ付けない拒絶っぷりはその表れか。

旧Fateにおける魔術はFate/stay nightより暗く陰湿なもので、黒魔術の側面が強かった。自然、女性のマスターは魔術師というより魔女、呪術師の類になる。

綾香はウィッチクラフトという陰性の魔術を学んでいたが、どうも失敗ばかり。物語中盤より"そういう婉曲な嫌がらせは君向きではない"とセイバーからつっこまれ、イヤイヤ綾香曰く"頭の悪い魔術"である元素変換（フォークロア）に切り替え、マスターとして戦っていく事に。

……ちなみに、その成否は語るまでもない。

マスターとサーヴァントは同質の者。正なるサーヴァントは正なるマスターにしか喚ばれないのだから。

Introduction

旧セイバー

正体とか宝具とか、ほとんどFate/stay nightと同じです。違うのは性別ぐらい。金髪我様なあの人に似ていますが、そもそも金髪我様のデザインラインはダーク化した旧セイバーなのだった。

物語中盤、アーチャーによって倒され、消滅。バーサーカーのマスターによってブラック化して再召喚されるのも、ランサーと仮契約した綾香との戦いの末に正純化し、バーサーカーチームを破ったりした。

ちなみに、このエピソードが好きだった原画担当の強い要望でFate/stay nightにおける黒セイバーが実現した。「セイバーって言ったら黒でしょう」とは原画担当の弁。うむ、よっぽど黒い（悪い）セイバーを描きたかったのであろう。

そしてFate豆知識。Fate/stay nightをゲーム化しよう、という話になった時、宝具にはルビが必要だからルビがふれるスクリプトエンジンを、という事で吉里吉里という新しいエンジンを使用する事になったとか。

Barthomeloi Lorelei

Introduction バルトメロイ・ローレライ

魔術協会における中央学院、ロンドンは時計塔が誇る"現代最高峰(プロ・タイーン)の魔術師"。

時計塔院長補佐。聖歌隊・クロンの大隊を指揮する現魔導元帥。魔術属性は風。

過去、死徒二十七祖を二体撃破し、教会に引き渡したバンパイヤハンターでもある。

これといった特異魔術を持たないオーソドックスな魔術師だが、個々の能力が最高値である為、あらゆる状況において優秀な成果をあげてきた。

シンプルイズベスト。もとが強ければ特殊能力などいらない、という典型にして完成系。

自身も優れた魔術師だが、ローレライが選び抜いた五十人からなる精鋭の魔術師たちを引き連れ、敵を殲滅する。その姿は楽団を率いる若き帝王そのものだとか。

ローレライの背後に控える隊員たちも一流の魔術師たちだが、彼らがおらずとも、ローレライ単体で二十七祖レベルの死徒と真っ向勝負ができるのだとか。

Explanation 覚書

ロンドン魔術協会における支配階級、ロードの一人。

魔術協会でも古い血筋の家柄ではあるが、その起源も、後継の様式も明かではない。同じくロードであるアーチボルト家とのみ多少の交友がある程度。

家名であるバルトメロイという銘記すら由来は不明。

時計塔創設時に現れ、その強大な"貴い魔術回路(プレシャス・ブラッド)"を以てロードとなり、以後、何百年と頂点に君臨してきた一族。

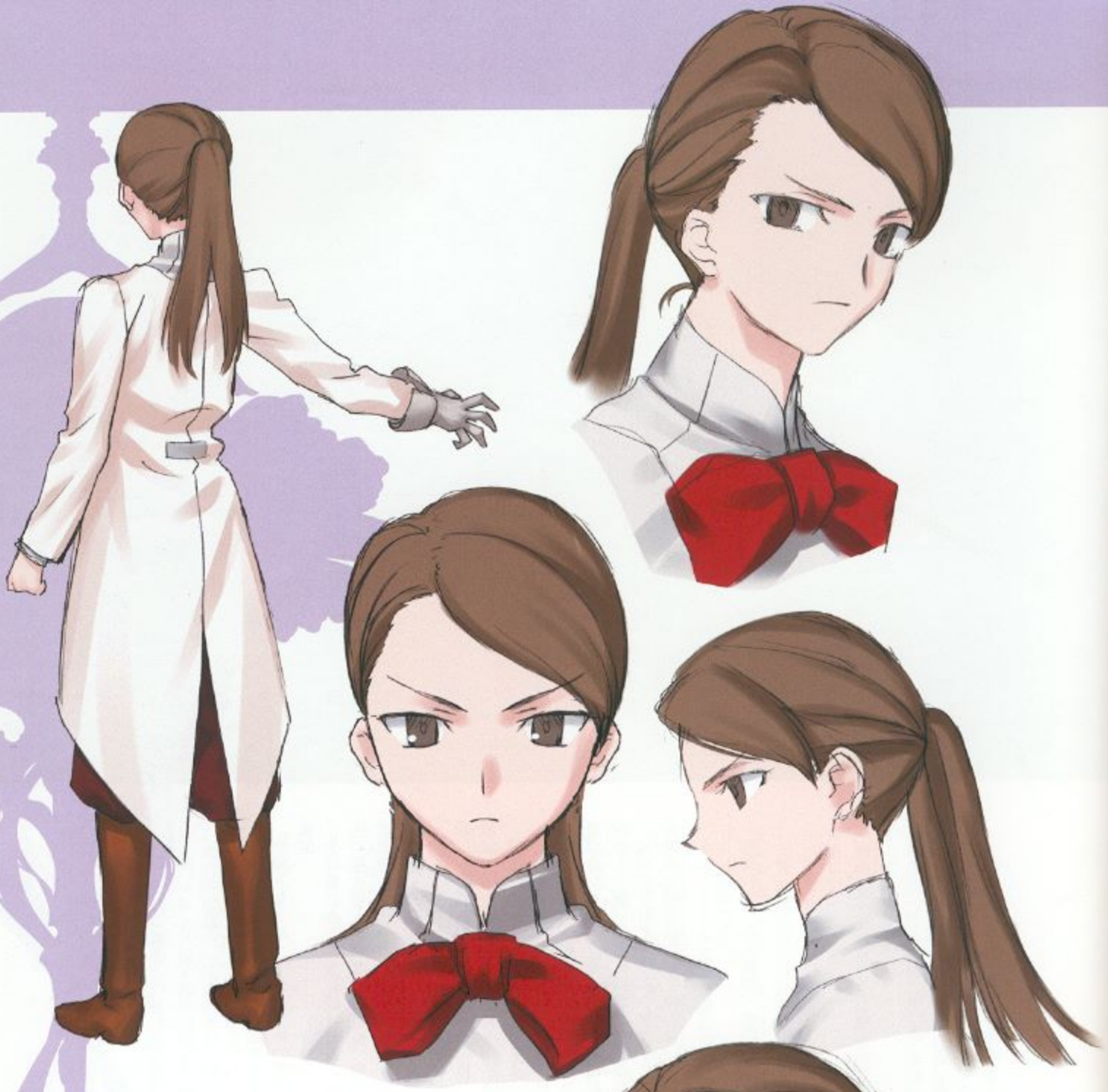
今代の当主であるローレライも、その名は当主となった後に付けられた程度のもの。彼らにとっては"バルトメロイ"という響きこそが名前と呼べるものなのだろう。

代々完璧主義なのか、バルトメロイの当主は魔術師として完成するまで人前には現れず、バルトメロイの館内でのみ育つ。未熟なまま外界に出るのは何よりの恥であるらしい。結果、魔術協会に足を踏み入れる時は、その時点で一部門の総帥となっている。

ある意味二十七祖より強烈な貴族主義者で、同じロードたちですらより尊く優れた血に服従するべきと考えている。バルトメロイの当主が自分たちと対等と見る魔術師は第一魔法の具現者のみだ。

二十七祖の王、白翼公オーテンロッゼに並々ならぬ執着を持ち、白翼公が何十年とかけて用意してきたアルズベリの儀式を阻止する実行部隊に参列する。

事前に妨害工作をしなかったのは白翼公を誘き出し、儀式中にこれを阻止し、無念の声をあげる吸血鬼どもの無様を見るためだ。



Source

出典／the dark six(仮名)

魔術協会におけるアルズベリ監察連盟のリーダー……なのだが、貴族主義がいきすぎて他の魔術師たちと協力する事がない為、リーダーでありながら孤立している困ったちゃん。

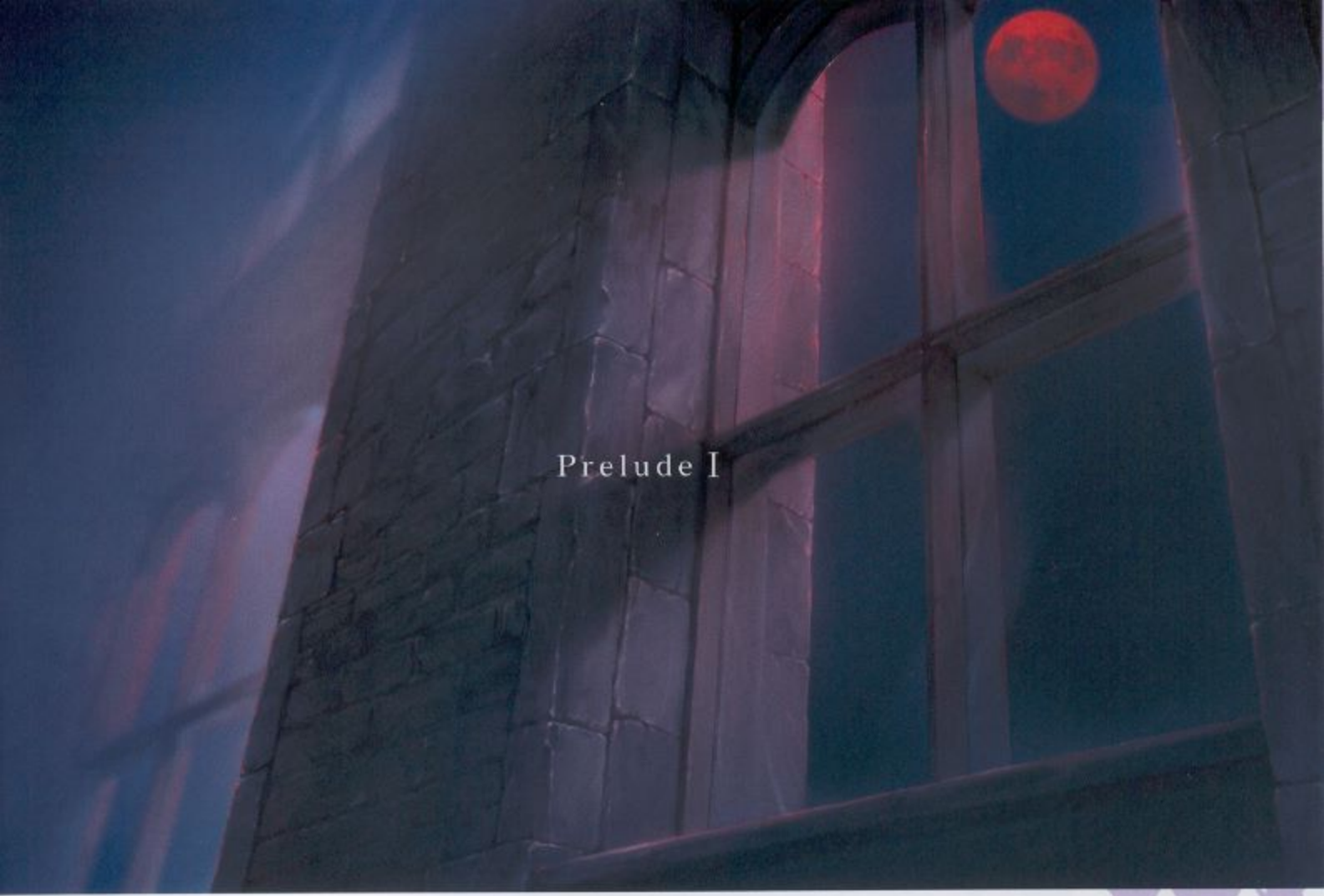
特殊な成長過程を送った為、家庭的なものに興味、耐性がない。

本人自身、"その人間の人格より、その特性を評価する"という主義なので、強力な特殊能力(タレント)を持つ人間にはそれなりに関心を持つ。

徹底した貴族主義なこの人物は、しかし、自分たちのみが貴い血族と信じているが故に、他の貴族たちなどどうでもいいのだ。

ローレライにとっては労働階級も支配階級も同じもの。その中で特筆すべき物があるとすれば、それは生まれではなく授けられた個別の能力だろう、という事らしい。

典型的な、とことん人間性を排したお嬢さまキャラとして登場。……今のところ、メインヒロインの一人として考えられているとかいないとか……。



Prelude I

0.

死徒ルヴァレ。
ノルウェイの霧に潜む、齢五百年を越える吸血鬼。
空席となった二十七祖、その十位をじき受け継ごうという大貴族。
生け贄の血を搾取し続けた事、およそ五千命。感染による被害の拡大を入れればその数倍。親族の質も数も、重ねてきた外道魔道も、超越者の中の超越者を名乗るに相応しい不死の怪物。
その一門の中枢が、この、朱月に照らされた古城だった。
通常、彼ら死徒の根城は人に発見できるものではない。闇に影に、良識への憧れ、禁忌への畏れによって覆われた彼らの魔城は、招かれた者にしか姿を現さないからだ。
幾重もの結界、強大な魔力によって隠された聖域。
自然すら欺く不可視の守りは、妖精たちの住む異界に近い。
死徒ルヴァレの城とて例外ではない。この湖は祖の魔城には及ばないものの、幾度となく異端討伐の軍勢をかわしてきたまやかしの城。決して脅かされる事のない不滅の証だ。
五百の年月そうであったように、それは、これからも変わらぬ繁栄と城主は信じて疑わない。
――滑稽にも。
彼女の率いる大隊が、その歴史を無に帰すこの夜まで。

Explanation

／死徒【用語】

吸血種の大部分をしめるモノ。一般的な吸血鬼のイメージ。
元々は真祖が用意した緊急用の食事にすぎない。真祖は自らの吸血衝動を抑えきれなくなった時の為に、あらかじめ生きた血袋を用意しておいたのである。
この、真祖に血を吸われ、下僕と化したモノを死徒と呼ぶ。
中には真祖の手ではなく、魔導探求の末に不完全な不老不死（吸血種）になった者もいる。彼らは死徒たちの築いた社会に参加する事で、発端は違えど同じ吸血種として認識しあう。

1.

幾つもの人影が、湖に浮かぶ古城を取り囲む。
数にして五十。この魔境にそれだけの人間が現れた事はこれが最初であり、最後だった
「右翼三隊、結界基盤に侵入完了。左翼指揮補佐、城内の索敵終了。各自、魔術回路の秒針を合わせろ。10、6、3、0、状況完了。――よし。副官に定刻通りと伝令を」
湖を包囲した魔術師達には一糸の乱れもない。その在り方は魔術師というより軍隊のそれだ。自己を排した無個性な集団。その実、その全てが協会において一部門を任されるだけの魔術師である。
故に、その名をクロンの大隊。
五十の数で大隊を名乗るのは誇称ではなく、むしろ謙虚に過ぎると言うものだろう。
「――湖一帯の術式を掌握いたしました。結界の逆相には半刻。土地ごとの消去をお望みなら、一時間ほどで開始できますが」
大隊を束ねる副官が、傍らの少女に指示を求める。
完璧な勝利か、徹底した殲滅か。
城に進行し闇に潜む吸血鬼どもを一匹残らず消し去るか、それとも――戦闘など行わず、この土地ごと一切を無に帰すか。
結果は同じであるが、より確実なのは後者だ。古城を取り囲み、優れた陣形を組み上げたところで敵は百年単位の吸血鬼。万が一にも獲り逃す事もある。
ややりすぎのきらいはあるが、ここで土地ごと地図から抹消してしまう方が大隊の方針に添おう。この城を発見するまで数年を費やしたのだ。ここで吸血鬼どもの頭を逃し、次なる隠れ家に逃げ込まれては意味がない。それを、
「どちらも有り得ません。恥を知りなさい、副官」
少女は、一言に切り捨てた。

そのような愚考、思慮する事さえあるまじき行いだと。これは異端討伐ではない。威光を示す為の巡礼なり。いかに力をつけようと、祖ですらない吸血鬼に従者を使うなどもっての外。哀れな虫一匹ならばこそ、少女自らが慈悲をもって踏み潰さなくてどうするのか。
「始めます。貴方たちは城壁の警備を。決して、一頭も逃さぬように」
「バルトメロイお一人で……？　しかし、それは」
大隊の魔術師たちは少女に絶対の信用を置いている。彼女の技量ならばルヴァレの一族、その全てを溜息まじりで殲滅できると理解している。
だが、その事実と殲滅の方法は別の話だ。
大隊は常に効率的な運営を良しとする。少女一人では半刻ほど。しかし大隊でかかればその半分で事足りよう。戦闘とは、その過程においても勝利していなければならない、というのがバルトメロイの不文律ではなかったか。
「間違えぬように。これは試練や、ましては戦いなどではありません」
大隊を湖に残し、少女は湖面を歩いていく。
数百年、ただの一人も人間を通さなかった城門を、腕の一薙ぎで破壊する。
「時には戯れるのも我らが務め。狩りは優雅に、愉しみながら行うものです」
眉一つ動かさず。その瞳に冷たい憎悪を宿して、少女は侵攻を開始した。

2.

時計塔には、一人の若き女王がいる。
名門バルトメロイの今代当主。魔法に至らぬとしても、魔術だけで奇跡に指をかける才能の結晶。魔術回路のみなら学長す

Explanation

／死徒ルヴァレ【人名・使徒】

湖の死徒。使徒の中でも祖に準じる歴史を持つ古い死徒。ルヴァレ自身は愛玩目的で真祖に汲み上げられた“美しい”だけの人間であった為、超抜能力はない。
数百年前、教会の代行者によって湖に追い込まれ死滅したものとされていたが、奇跡的な生還を果たす。
以後はそれまで関心を持たなかった“眷族”作りに傾倒し、死徒最大の派閥である白翼公の傘下となった。

ら凌駕すると言われる、いと気高きローレライ。
文字通り時計塔の頂点に君臨する彼女には、しかし、拭いがたい悪癖があった。
否、これは彼女ではなく、バルトメロイの宿病と言うべきか。
彼らは例外なく吸血鬼を敵視している。
理由なき敵意は人間としての尊厳か、貴族としての誇りからか。バルトメロイの当主たちは率先して死徒の討伐を行い、その習わしに添うように、少女も吸血鬼の殲滅に時間を割いた。
誰よりも病的に。時に院長補佐の責務を蔑ろにしてまで吸血鬼――死徒と区分される吸血種たちを滅ぼしてきた。
少女自身、理由の分からない憎悪から。
それは歴代のバルトメロイ当主に勝る執着であり、彼女自身、制御のできない感情だった。

◆

城の本館。たまたま追いつめた十八頭目の獲物が、死徒ルヴァレと呼ばれるモノだった。
一連の展開は、今までの雑種に比べればようやく〝戯れ〟になったと言えただろう。戦闘と呼べるものではなかったが、とりあえず退屈はしなかったのだから。
「無様な、わざわざ赤月まで待ってこの程度か。所詮人蛭。五百年、無為に過ごしてきたのですね」
死徒にとって月の赤い夜は絶世を迎える時だ。吸血鬼退治に特化した教会の代行者たちも、赤月での戦いは行わない。
その禁忌を破り、なお蹂躙するがバルトメロイ。
現代最高峰の魔術師、単身で二十七の祖各々に匹敵する聖女である。
「――うむ？」
その聖女の鞭が、わずかに迷う。城の上階から強い魔力を感知したのだ。それは目前の死徒と同じものであり、より強力な吸血鬼の気配だった。
『お、お助けを、お父さま――！』
その一瞬の間に、少女は死徒の逃走を許してしまった。
瀕死とは言え百年単位の死徒。それ程度の底力は見せたらしい。
「……無礼な。私から、逃げるなんて」
不愉快げにこぼしながら、少女はあくまで優雅に、狂走する死徒より早く廊下を歩いていく。
その唇は、先ほどより少しだけ、楽しげに歪んでいた。

1－2.

同刻。
「我々より先に、城に入った者がいると？」
大隊を少女より任された副官は、信じがたい報告を受けていた。
「事実か。事実だろうな。侵入経路はなんだ。ルヴァレの馬の臓？　奴らの馬車に潜んでいたと？」
侵入者とやらは、城に招かれたルヴァレの血族たちに紛れて侵入したらしい。馬車を牽く馬のはらわたに身を隠して。
よくある手だが、死徒の馬ならば獣と言え魔物。それを制する時点で、まっとうな人間ではあるまい。
「……しかし、その方法では中に入った時点で人間だと気付かれる。バルトメロイ入城まで動きがなかった以上、ルヴァレは侵入者に気付いていなかった筈。と、なると――」
その侵入者は、死徒と同種に見るべきだ。魔術師や代行者でない。人間である以上、吸血鬼の鼻は誤魔化せないのだから。
つまり――この侵入者は、単独であり、死徒でありながら、ルヴァレに敵対する者である。その条件に合う〝死徒〟は、たしかに一騎、存在する。

Explanation

／死徒二十七祖【用語】

死徒たちの大元である二十七つの祖の事。現在では半数の祖が教会によって封じられている。
最も古い死徒たちの事で、中には既に消滅している祖もいる。二十七祖の席が今以て不滅であるのは、消滅した祖の配下であった死徒がその座を受け継いでいる為。
封印中の祖は聖堂教会の棺に収納されているが、彼らでは滅ぼしきれない為、半ば永久監獄となっている。祖が封印された派閥は今も健在であり、祖の奪還、あるいは消滅の為に力をつけているとか。

「バルトメロイに報告を。城の闖入者は死徒……二十七祖の一人である可能性が高いと」

少女の力量ならば、既に他の客がいる事など察していよう。だがその正体は遭遇するまでは掴めまい。出来ないのではなく、あの少女は索敵や調査といった瑣末事を好まないのだ。

「どうした、不思議ではあるまい。ルヴァレは空席となった十位を継ごうという死徒。祖のいずれかが訪れる事もあろう。報告を急げ。戯れが過ぎるとバルトメロイに火が入るぞ」

しかし。どうも、報告はそれだけではないらしい。

魔術師はいっそう首をかしげながら、

「それが……もう一つ、おかしな事が」

大隊の一員にあるまじき間の抜けた台詞で、たった今見てきた、見た事もない魔術の痕跡を報告した。

3.

城の上階。死徒（ルヴァレ）を追いつめた寝室で、少女は一人の悪鬼と遭遇した。

夥しい憤怒の呪いに身を包んだ黒影。

長剣と長銃を携えた、いまだ人間の匂いを残す、血に痴れた吸血鬼（ドラクル）に。

『ひ、ち、父上……！』

黒い吸血鬼の前には、半身を断たれ撃ち抜かれた死徒（ルヴァレ）の姿。

男女の違いはあれ、それが先ほど自分が追いつめた使徒と同じモノだと認めた瞬間、

「風よ――――！」

少女と黒い吸血鬼は、互いが、この城における最強の敵と認識した。

咆哮をあげるが如く回転する少女の魔術回路。

怨嗟をまき散らしながら振るわれる黒い長剣。

古城を切り取る真空の魔術（やいば）。

弾かれ裂かれながら、狂風を刀身で飲み込む黒影。

次いで、響き渡る四連射。

迫る魔弾を、白銀の輝きで防ぐミスリルの聖外套。

攻防は一瞬。

交差した一撃の威力は城壁崩しに匹敵する。

寝室は少女の魔術の一薙によって切り取られ、テラスと化した。

「――、魔術師か」

カシン。黒い吸血鬼は手首のスナップだけで長銃の弾倉を開き、排夾し、魔剣を次の形態に移行させる。少女ですら眉をひそめる呪いに身を浸しながら、黒い吸血鬼の眼光は理知としたヒトのソレだ。

否、むしろ怨嗟こそが我が理性と。

怨念がなければ正気ではいられぬその姿は、まさに、復讐鬼の名が相応しい。

「――エンハウンス。死徒殺しの吸血鬼」

その噂が広がりだしたのはつい最近の事だ。

死徒を殺す死徒がいる。

死徒同士の戦いは珍しい事ではない。彼らは支配圏の塗り替え、戯れの勢力争いを娯楽としている。死徒が死徒を倒す事は、彼らにとっては悪ではない。滅ぼし、滅ぼされたところで吸血鬼の数に変化はないのだから。

だが目前の男は別だ。

コレは吸血鬼そのものを滅ぼす。頭を潰し、血族を皆殺しにし、領地をすべて焼き滅ぼす。

その在り方は少女や代行者たちに近い。死徒にとって〝死徒を滅ぼす〟為の闘争を行う者は、彼らにとっても度し難い裏切りなのである。

それがこの黒影、死徒エンハウンス。

二十七祖の一人として現れた、主殺しの復讐騎。

「……一番乗りだと思っていたが。私は二番手だったのか」

Explanation

／魔術協会【組織名】

国籍・ジャンルを問わず、魔術を学ぶ者たちによって作られた自衛団体。（無論、名目上ではある）

魔術を管理し、隠匿し、その発展を使命とする。

自らを脅かすモノたちから身を守る為に武力を持ち、魔術の更なる発展の為の研究機関を持ち、魔術による犯罪を抑止する為の法律を敷く。

現在、協会の中心地はロンドンとされている。

だが。その魔物すら、少女を恐れさせるには至らない。エンハウンスの力は分かった。それなりに強力だが少女には及ぶまい。せいぜいルヴァレの二倍強。二十七祖たちが持つ超抜能力もない。その程度の平凡さでは苛立ちすら浮かばせられない。

少女の癇に障るものがあるとすれば、それは、一番乗りが自分ではなかったという点のみだ。

「いえ、それは許します。今回はほぼ同着――私の前に出なかった事を感謝しなさい、吸血鬼」

「……」

黒影は答えず、先ほどまで追いつめていた使徒を捜す。

巻き込まれて四散したか、運良く逃げ延びたか。

答えは、忌々しくも後者だった。

「逃げ足だけは一流のようですね。――こうして。詰(チェック)めの前に、野良犬の助けがあったとしても」

少女の標的はとうに変更されている。

闖入を許しはした。だが狩りの邪魔を許す気はない。少女は魔眼に火を灯し、目前の吸血鬼に照準を合わせ、

「――奴らは、親・子・だ」

黒い吸血鬼の言葉を、一瞬で理解した。

両者、弾け合うように走り出す。

少女は死徒が逃げ出した先――尖塔に続く回廊を。

黒影は吸血鬼らしく、外壁を這う蜥蜴のように尖塔へ。

その決断の早さ、的確さ。少女には強者の誇りと慢心と、それらを切って捨てる冷徹さがある。

奴らは親子だ、という言葉の意味。

死徒ルヴァレは既に後継者を選んでいた。

少女が追いつめたルヴァレは娘であり、黒い吸血鬼が追いつめていたルヴァレは息子だったのだ。

一人一人では取るに足りないのも頷ける。奴らは力を分け与えられたばかりの幼子。真に狩るべきはその父であり、同時に――彼ら親子が揃えば、わずかではあるが、今の少女の戦力に迫る。

血分けをした死徒の力は足し算ではなく掛け算だ。今は復讐騎より死徒ルヴァレの消滅が優先される。

だが間に合うまい。

少女は狩りが戦いになった事を受け入れながら、元凶の潜む尖塔に踏み込んだ。

そこには、やはり。

「――、え？」

寄り添うように、眠るように。

一切の出血もなくバラバラに死に絶えた、無惨な、三人の使徒(おや)の亡骸があった。

zero・

〝――今夜、死神が現れる〟

親祖ルヴァレの元に予言が届いたのは、バルトメロイが現れる三時間前の事だった。

殺し合い、消滅を繰り返す二十七祖が今も健在な理由。それは予言者の役割をもった祖がおり、彼女が常に死徒たちに死を予告し、すみやかに後継者を作らせている為だと言う。

その予言を前にして、ルヴァレは笑った。

なるほど、先ほどから湖をうろついているバルトメロイの魔術師どもは確かに油断ならない。風向きが悪ければ滅びるのは自分達だろう。だが絶対に回避できない死ではない。噂に聞く薔薇の予言も的はずれと言わざるえまい。

ルヴァレは愛すべき息子達にもてなしの準備をさせ、この尖塔で自らの隠匿物を開封する。

ルヴァレとて、自身が二十七祖に足る器とは思っていない。

Explanation ／エンハウンス【人名・死徒】

復讐騎。死徒二十七祖の一人。18位。

エンハウンス・ソード（片刃）と謳われる、祖に成ったばかりの吸血鬼。

死徒と死徒が敵対する事は珍しくはないが、それはグループ内でのみの権力争いを意味する。王である祖の後継者を目指す戦いで、他の派閥(他の二十七祖)と争う事はない。が、エンハウンスはその規律を破り、他の二十七祖そのものを狩ろうとしている。

祖と名乗るにはあと二百年は必要だ。その二百年を埋める為に、彼は魔術師どもから魔術礼装、観念武装を奪いに奪ったのだ。
その成果。彼のコレクター、悪魔使いメレム・ソロモンですら羨むこの遺物を駆使すれば、あの程度の小娘はたやすく返り討ちにできよう。
「――ほう。取り囲んだかと思えば、小癪にも単独入城か。慢心で命拾いしたなバルトメロイ。結界崩しをかけておれば、逆に貴様らが地の底に落ちていたぞ？」
にやりと頽髭をさする。
親祖ルヴァレは、楽しげに少女の入城を眺め、ふと、頬に当たる風に気を逸らした。
この、完璧な密室に、風。
刹那。些細な疑問を追い抜くかの超速で跳び退いたのは、若輩ながらも大貴族の名に恥じぬ才気と言える。
そうして。床に着地した後、彼はずるりと、腰元からスライドした。
「な――――」
落ちる。落ちる。落ちる。
驚愕で死にかける。
何に驚いたかというと、傷がまったく塞がらないという、人間だった頃の感覚に驚いた。
いや、懐かしんだというべきか。
おぞましくも素晴らしい、人でなくなった時の記憶に似て。
切断された箇所は、完璧に〝死〟んでいた。
呆然と見上げる。傷つかず崩れないハズの天井に、ぽっかりと穴が空いている。
目が眩むような赤い月。
部屋には。何の変哲もないナイフと、顔を覆う包帯と、初見でありながらもコレがそうなのだとはっきりと分かる、静かな、死神の姿があった。

4→5

静まりかえった尖塔の部屋。
少女が踏み込んだ時、既に事は済んでいた。
親祖ルヴァレと子供たちの亡骸。
無言で佇む黒い吸血鬼。
そして、自分でも気付かず、屈辱で歯を鳴らすという、バルトメロイにあるまじき己の姿。
「……目的は、ルヴァレの持っていた鉄槌か」
黒い吸血鬼が呟く。
少女ははしたなくも、ぎり、と右手の人差し指を噛んだ。それはひとえに、耳障りな歯鳴りを止める為と――
「去れ。今は見逃してやる、吸血鬼」
言われるまでもない。
黒影は天井に開いた穴へ跳び上がり、鳥とも虫の足ともつかない無様な羽を生やして消えさった。
……一人残された惨殺空間。
革手袋に、じわりと血が滲んでいく。
恥辱で気を失いかねない。そう。一番乗りを気取っていながら、自分は二番手ですらなかったのだ。まさしく、狩りでもなく戦いでもなく、此度の儀は道化の類。
「……必ず見つけ出します。その時こそ、姿さえ見せず勝ち抜けた貴君に、心からの賞賛と――」
この血と痛みに値する報復を与えましょう、と。
少女――バルトメロイ・ローレライは、未だ出会ってもいない何者かに歌いあげた。

Explanation

／DEATH【？？？】

暗殺者。切れぬ筈のものを、バターナイフを入れるかのように切り裂く。不滅である死徒をたやすく解体する、文字通り死神の如き影。
復讐騎同盟、死徒社会において噂になりだした神出鬼没の災禍。
……しっかし。大した報酬もなく西へ東へ、ホントに働き者だこと。

Introduction

蒼崎橙子

蒼崎が生んだ天才。

数こそ平均的だが精密さで他を圧倒する美しい魔術回路、生まれつき宿していた魔眼、世界の機微を感じ取る五感、自らの特異性を削る事なく摂理に適合する知性、と非の打ちどころのない才能の塊。

他の魔術師たちのように現代社会に寄り添う必要はない、と育てられた純粋培養の"魔法使いの卵"である。

純粋に『魔術師』の逸材として協会も注目していたが、彼らにとってみればそんな才能より魔法使いの跡取り、という事実の方が大きかった。

齢十歳にして多くの名門魔術師たちが訪れ、これを当然のように受け流した橙子の姿に、ついに本物が現れた、とますます将来を期待された。

が。それほどの風説が流れていても、近い将来同胞となるであろう他の魔法使いたちは、一人も彼女の前には現れなかった。

……その意味を薄々感づきながらも、決定的な答えが突きつけられる刻まで、彼女は『周囲が望む』天才で在り続ける。

Explanation

蒼崎橙子の事情

魔法使いの跡継ぎとして育てられている為、両親、妹とは離れて暮らしている。(両親の家には青子、山奥にある祖父の工房に橙子)

なので、十八歳まで学校に行った事がない。

妹の青子とはちょくちょく会って話をしていたが、基本的には世間を知らない天才少女、という在り方。

世捨て人っぽいところはなく、有り余る魔術の才能、あの祖父の元で暮らしている、という条件でありながら、落ち着きのあるいいお姉さんだったりする。

青子のどうでもいい失敗談を聞いては真剣にアドバイスをしたり慰めてあげたりも。

(ああ、なんて微笑ましい姉妹なんだろう!)

蒼崎の魔法を受け継ぐ為、大魔術の起動に偏った教育・修練を積んでいる。

本人はもっと細やかな、世界を動かすものではなく世界に残るものを作り上げる事が好きらしいのだが、それは我慢しているとか。

特別な子供である橙子から見ても"怪物"である祖父を恐れながらも尊敬している。

反面、一般人として気ままに生きている妹の青子には複雑な姉妹愛を持っているのだが……。

十五歳をすぎた頃から、祖父の期待に応えようとするあまり視力が落ち始めている。せっかくの魔眼だが魔法に比べれば取るに足らないものなので、視力の低下は秘密にしているようだ。

Explanation 02

この後

色々あって蒼崎の家と縁を切る。

(人為的な二重人格者になるのはこの時)

その後、修業時代に知り合った魔術師たちを頼ってロンドンの魔術協会に入籍。代償に多くの負債を持つ事になるが、二年であっさり返却。

さらに数年後、希代の人形師として大成し封印指定を賜り、すぐさま工房を引き払って協会から行方を眩ました。

妹同様、一つの場所に留まらない人なのだった。

Sourre

出典／空の境界、魔法使いの夜（未発表）

空の境界に登場する蒼崎橙子はこれより十年ほど経った後の、二十代後半の姿である。

行方を眩まして自堕落に暮らしていたところ、殺人鬼と一般人などと言うけったいな二人組と縁ができ、これまた過去の因縁と出会ったりする。

余談ではあるが、『魔法使いの夜』の最後である呪いを受けてしまい、以後は解呪するまで三咲町に帰れない体になっている。青子と有珠さんマジ外道。

Brainwashing-Detective

Introduction

洗脳探偵

人知を超えた難事件と共に現れる、さすらいの名探偵。密室探偵とも呼ばれる。メイドという概念が失われた絶望世界・トオノシティの住人。

口数は少なく、無愛想、鉄面皮。

解決率１００％でありながら、加害者はおろか被害者にも恐れられる冷徹な法の執行人。……ある意味怪人そのものだが、さもありなん。狂った悪逆を制するのは、狂った正義のみなのだから。

深い青色の眼はあらゆる隠し事を射抜き、冷徹な一指はどのような言い逃れも許さない。

「推理に完璧です」「アリバイから動機です」等々、妙に説得力のあるキメ台詞で多くの犯罪者たちを打ち破ってきた。

行方不明の姉を捜し出して捕らえるため、今日もトオノシティの夜を駆ける。

Explanation

特殊能力：ロックドルーム・ディティクティブ

"お部屋をお連れします（メイド・イン・ワンダーランド）"の囁きと共に巻き起こる怪異現象。

密室探偵は密室専門の探偵、という意味ではない。密室で事件を解決する探偵、という意味である。

洗脳探偵に目を付けられた、じゃなくて、選抜された容疑者は気が付くと密室の中におり、洗脳探偵と二人きりになってしまう。

その数分後。

密室から出てきた容疑者は人が変わったように犯行を認め、かくて事件は解決するのであった。

……洗脳探偵の冷徹かつ鮮やかな推理はぜひ拝聴したいところではあるが、残念ながら密室の中で何が行われているか知るよしはない。

Explanation 02

キャラ属性

勘違いされがちだが魔法少女ではない。どちらかというと夜の街に現れるダークヒーロー的な立ち位置。

精神改革、虚言訂正、自供強制がメインスキル。

実にクールな性格で、ロックドルーム・ディティクティブ中は椅子に腰をかけ、理の支配者の如き姿を見せるとか。

探偵を続けているのは、それが姉を見つけるのに一番早い方法だからだとか。

言うまでもないが、その正体は誰も知らない。

Source

出典／月姫

……あんまり説明したくないが、月姫のヒロインの一人・翡翠の可能性の一つ。制作者たちの意図とは無関係なところから発生した、誤字と脱字が生み出したアヴァターと言えよう。

月姫格闘『ＭＥＬＴＹ　ＢＬＯＯＤ』の翡翠のラストアークで、この力の一端が見られます。

はい――貴方を、犯人です。

Introduction

少女

投影。天使の幻想。
ギターを弾きます。へたくそです。
稼ぎの少ないゴドーのアパートメントに現れ、お手伝いと称して居候する遠距離トラブル型スタンドちゃん。
基本的に、いるだけで何もしてくれません。
特殊能力は微妙な癒し効果。得意技はゴドーの給料を食いつぶすこと。趣味は大樹の下に集まった人々の人生鑑賞。
やっぱバーチャルに恋しちゃダメだよなあ、とみんな思いつつも、やっぱりバーチャルってのは恋する為に作られるんだ、というお話。

Explanation

世界樹の街

タイプ・ヴィーナスの死骸を監視する為に作られた基地。
当時はこの土地に配属される者は島流し同然であったが、亡骸が地上を緑化させている事が判明し、徐々に街として成長していった。
タイプ・ウラヌス＆ネプチューン射出作戦において、大樹の葉はその大部分を失う事になる。

Explanation 02

天の亡骸（タイプ・ヴィーナス）

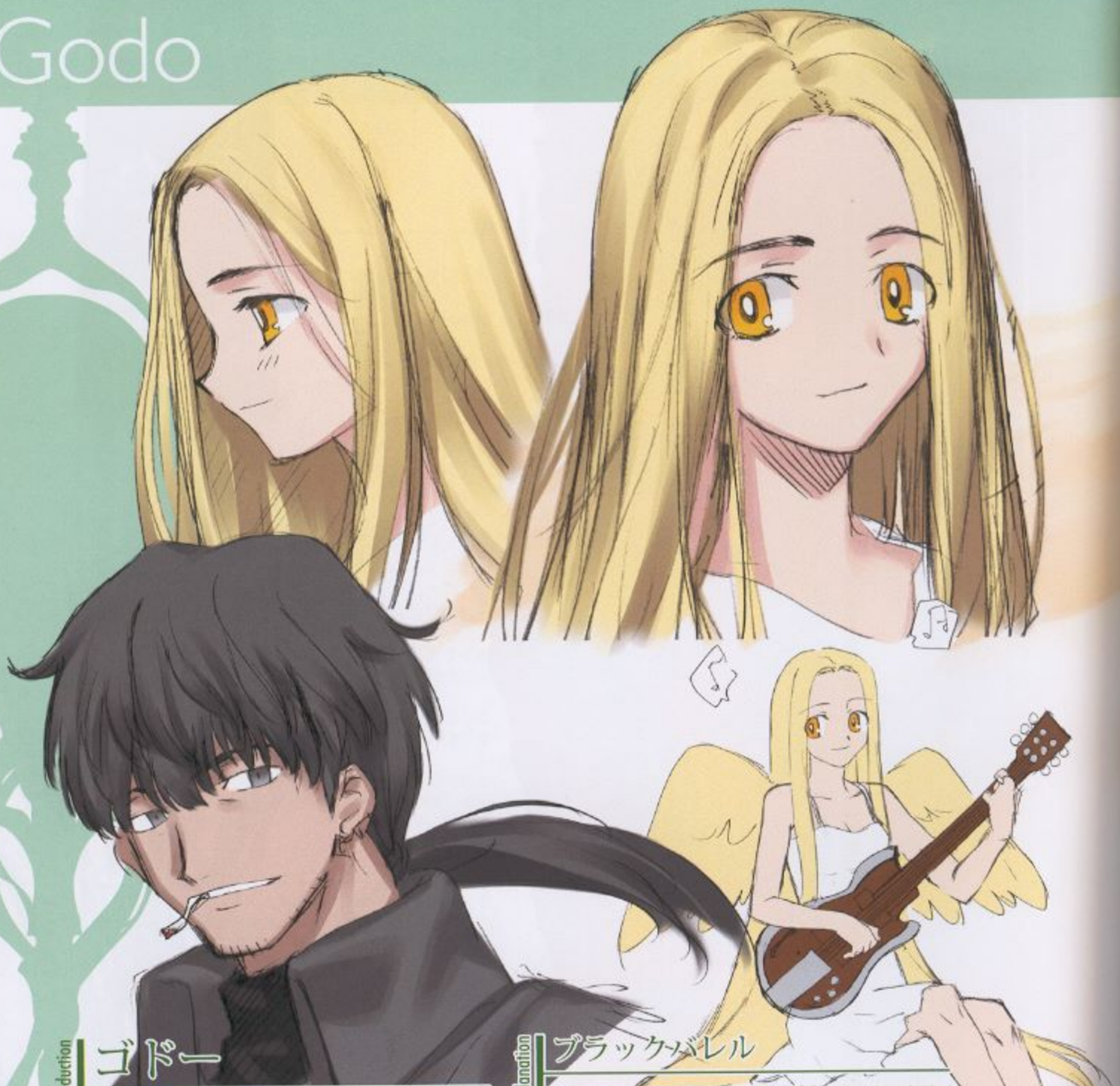
金星のアルテミット・ワン。
全長約千メートルほどの動食植物。一対の巨大な大樹を背にした魚のようなフォルムらしいが、雲海の中に隠れていた為、正確に記録した者はいない。
他のアリストテレスたちの侵攻にやや遅れるかたちで地球に飛来、長く雲海の中を漂っていた。
しばらく無害であったが理想的な苗床を探査・選定を終了し、ついに降下を開始する。
その正体は大地に根を生やし、何億という胞子（天使型の捕食端末）をまき散らす侵略型環境育生林床植物。生きたまま地表に下ろした時点で、現生態系の終焉を意味する。
……寄生型であった為に人間種の概念をも“摂取”してしまったアリストテレス。

Source

出典／notes.（月姫読本に収録）

健気で一途で天然な、恋に恋する×××××××。
入力されたコマンドは地球捕食、けど発生した答えは地上の生き物みんな大好き、というどうしようもないものであった。
ああ。不治なるもの、汝が名は愛情なり。

Godo



Introduction

ゴドー

本名消去。銃神、偽神という通り名で呼ばれる。荒廃した世界に残った、数少ない旧時代の"人間"。

生物としては強力だったが生命としては弱かった人間は世界終焉によって大部分が死滅し、残った者たちも大気に満ちたジンに適応できず死に絶えていった。

そんな終末の中でも生き延びようとした人間たちによる人工楽園の出身。

人工楽園自体は黒いアリストテレスによってすみやかに消滅したが、環境適応処置を受けていたゴドーは不運にも生き延び、地上に残った最後の人間として生きていく事になる。

もっとも、生き残ったところで先は長くない。

ゴドーにとって今の生活は月に住んでいるようなもの。機械と薬の助けがなくては満足に呼吸もできず、口にする食料は毒でしかない。

まさにお先真っ暗ではあるが、幾度もの終末を乗り越えてしまった為か、自虐的ではあるが悲観的にはならない、といった達観（諦観とも言う）に至っているので日々のんびりと過ごしている。

かつては復讐心から封印区アトラシアよりブラックバレルを発掘し、タイプ・ヴィーナス降下阻止作戦に参加、以後は戦いを避けて行方を眩ました。

風の噂ではとある街で行われたタイプ・サターン迎撃戦に参加し、戦死したとされる。

最弱ではあるが、最強の毒に耐えうる狙撃手。

Explanation

ブラックバレル

黒い銃身。第五架空要素を自壊させる、第五真説要素によって作られた兵器。

六人姉妹たちには天寿の概念武装と呼ばれる。

この銃によって放たれた弾丸は、真エーデルによって活動するモノなら、いかなる能力値をも無視して傷を与える魔の一撃となる。

直接肉体に打ち込まれる癌細胞のようなものか。

人間が霊長から転落した理由の一つに、大気に満ちたジンを扱えず、吸い込めば死に至るという事がある。

ジンという新しいエネルギーに拒絶された時点で人間はもっとも弱い生物になったが、ブラックバレルはその欠点を逆転させた兵器と言える。

汎用性が高く、各種オプションを換装する事で狙撃銃としても使用可能。

基本は曲銃床を用いるライフル型。

発掘時にはオリジナルとレプリカの二丁があったらしい。ゴドーが愛用していたのはオリジナルの方。

Source

出典／notes.（月姫読本に収録）

鋼の大地から、天使にまつわる話を切り取ったエピソードの主役。

最弱だが最強を貶める一手を持つ、という実に主人公チックな人物。

のちに、この芸風は月姫の志貴に受け継がれる事になった……ような、そうでもないような。

Introduction

魔剣・斬撃皇帝

アド・エデムの持つ魔剣。星を食うもの。

対象の大きさに合わせて刀身を増大させるだけの単純な魔剣。

エデムが手にした剣種から芽吹き、拡大・増築を思考の速度で行っていく。

しかし、いかに真エーテルを利用した魔剣と言えど、これだけの巨大質量を構成するには莫大な変換源が必要となる。

エデムの魔剣は増大すれば増大するほど、同時に大地を削り取ってしまう。資源を得る為に大地を流土させていった旧世界の方法と何ら変わらないエデムの魔剣は、人間を守る為に世界を滅ぼすという人間種の在り方の具現と言える。

魔剣構成前は種子状態で待機し、エデム開眼に呼応して大地に突き刺さり、緑なすが如く成長する。

図はその通常戦闘状態。青いオーラに見えるものは刀身の放つジンではなく、刀身によって裂かれた空。荒廃した世界の"赤い空"を切り裂いて真実を垣間見せる、斬撃皇帝の威容である。

Ado Edem

Explanation

アド・エデム

魔剣・斬撃皇帝を構成する騎士。
亜麗百種との戦いでは目立たない騎士だったが、アリストテレス飛来を期に表舞台に台頭。
その魔剣をもって"黒いアリストテレス(ライブ・ジュピター)"を一撃のもとに両断した。
以後、そのあまりに逸脱した魔剣の為、亜麗百種、人間種、騎士たちによって大断層に作られた廃棄場"魔女の大傘"に幽閉された。
……アリストテレスとの戦いが終わりに近づく頃、人類サイドの切り札として投入され、難攻不落と言われた"十字架(ライバトン)"を消滅させるも、以降の生死は不明。

Explanation 02

魔女の大傘【ウィッチ・スウィフト・アンブレラ】

大断層のただ中に建てられた城。
名の由来は、開いた傘を逆さにしたような足場に創られている為。
月姫でいうところの千年城の元ネタ。城のカタチをした牢獄で、数多の城壁と幾重もの扉、千の鎖で玉座に座るモノを縛り封ける。
城壁から玉座に向けて、それこそ蜘蛛の巣のように鎖が伸びており、玉座から立ち上がるには城の全てを破壊するだけの力が必要とされる。
その他、玉座まで辿り着く為には七十八の扉があり、これまた並の騎士では打ち壊せない"魔法の扉"であるとかないとか。

Explanation 03

大断層

亜麗百種の盟主、六人姉妹の末妹が作り上げた、世界を二分する大地の亀裂。
六人姉妹も好きで創ったワケではなく、騎士たちによって殺された末妹の断末魔がそのまま星を抉ってしまったにすぎない。
ちなみに鋼の大地において"魔術"は失われているが、六人姉妹はそれぞれ"本当の魔法使い"であったらしい。

Explanation 04

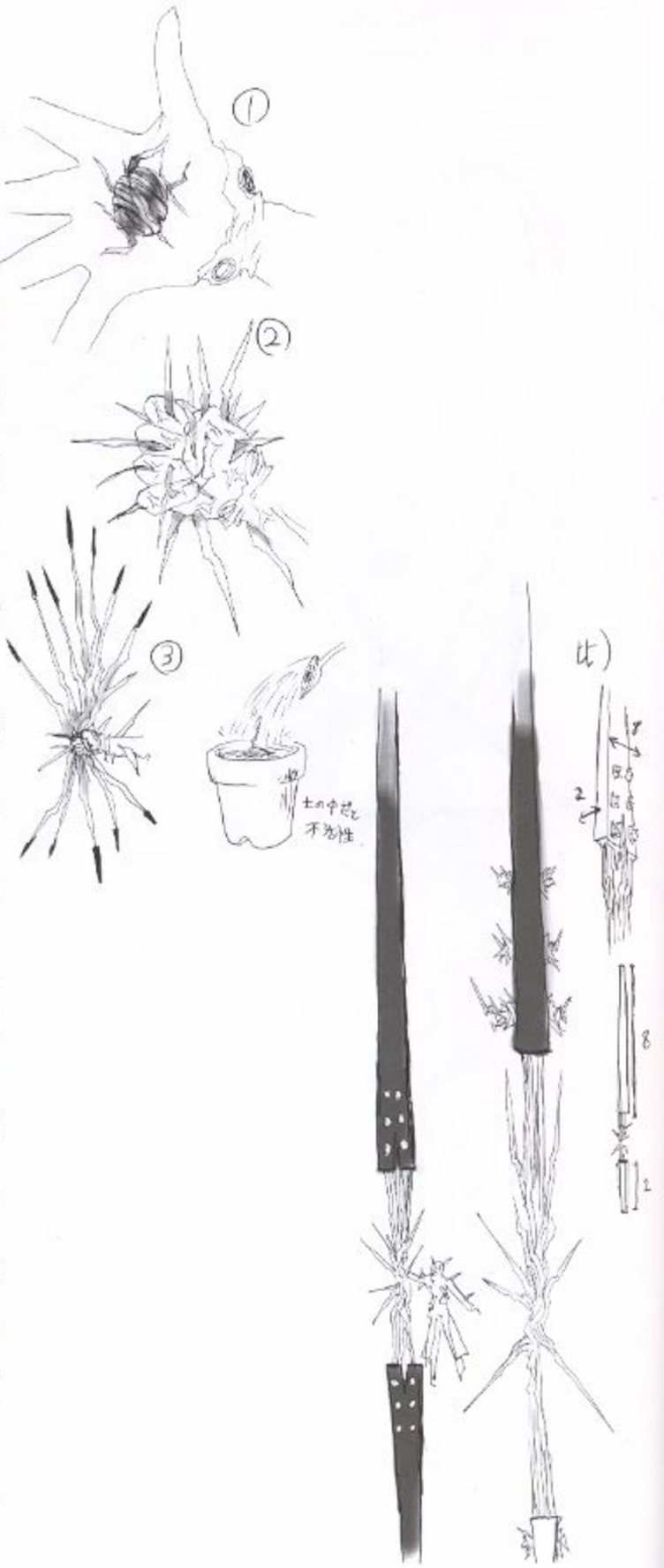
騎士

荒廃した地上でも生きていけるように適応・進化した新人類を人間種と呼ぶが、その中でもより人型の生き物として進化したもの。
誕生時から体外にもう一つの器官を持ち、いずれこれをジンによって物質化するに至る。彼らがジンによって物質化させたものを総じて魔剣と呼び、これを扱う者を騎士と呼ぶ。

Source

出典／鋼の大地(over count 1999)(月姫読本に収録)

人類滅亡後の、新人類と星の戦いを描いた物語。ジャンルはエセＳＦ。
環境に適合した新人類と、人類によって創られた次世代の生態系・亜麗百種との戦いを描いた御伽噺。
死した星の上で、次なる霊長の座をかけて楽しく仲良く内ゲバしていたのだが、おまえたちどっちもそろそろ死になさいよ、とばかりに謎の物体・アリストテレスたちが宇宙からやってきたのであった――。
……こうまとめるとなんとも救いのない話である。
各惑星の最強種であるアルテミット・ワン（アリストテレス）は、以後、TYPE-MOONのゲームにちょくちょく出てくる事になる。
また、余談ではあるが"赤い空を裂いて青い空が見えている"というのはデザイン担当のPFALZ氏のアイディア。げ、原作サイドでさえ忘れていた"赤い空"をこう使うとは……！



KINOPEDIA
白き月姫ファンタズムーン

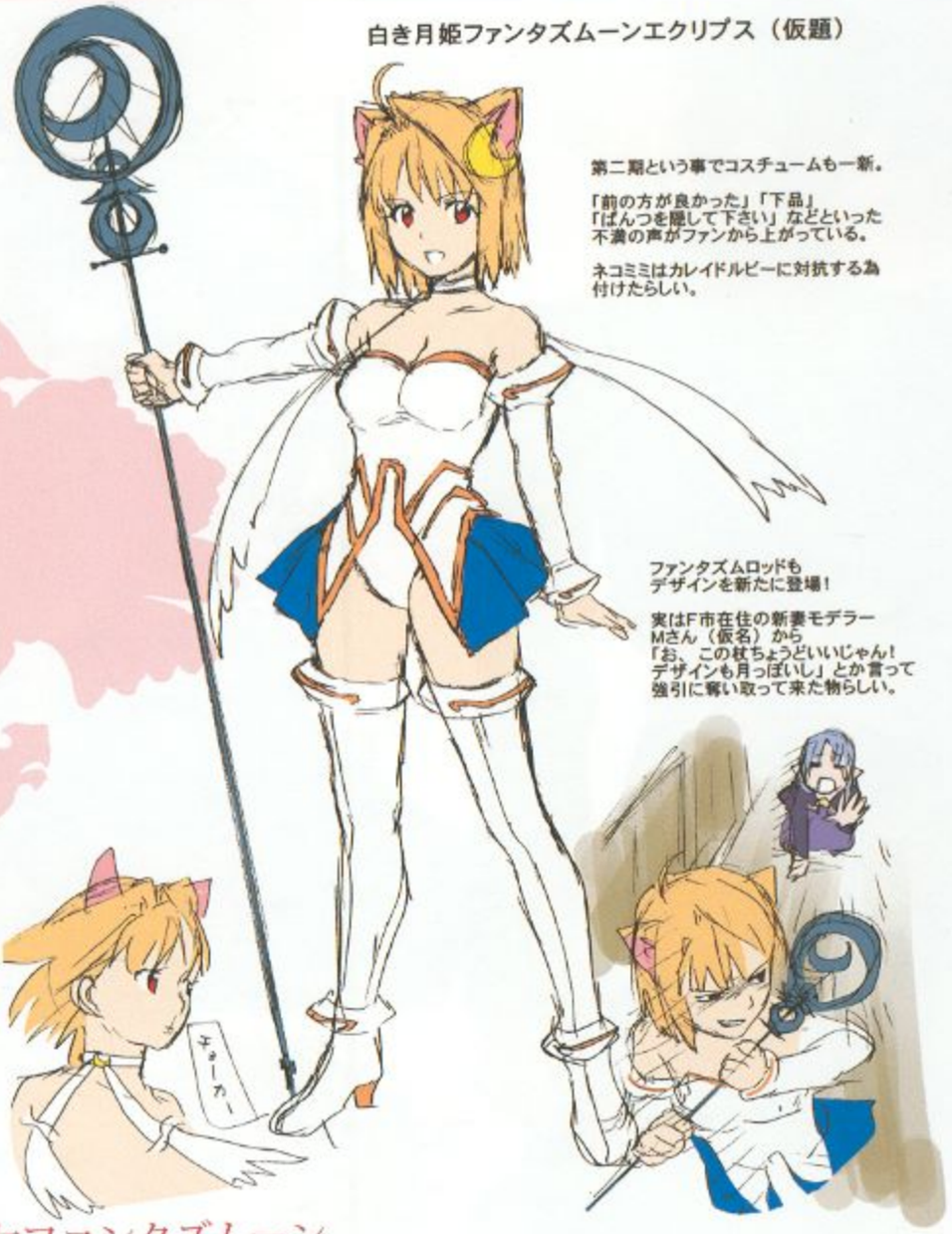
―ファンタズムーンとは

とある市限定で製作・放映されたカルトな魔法少女アニメ。なんでもその市で起きた実話を元にしているとの事。
番組は微妙な人気のまま終了したが、「……三話の敵幹部の扱いに納得がいきません」とスポンサーが続編の製作に着手。
スタッフを倍増し、第一期でしきりに組み込まれていた社会的メタファーを極力避け、子供向け作品として再スタートした「白き月姫ファンタズムーン・エクリプス」がある。
エクリプスにはアクション指導に謎のインド人マドモアゼル・カリー、演出・料理提供にミスター陳、声優の出演料交渉係としてグル目メイドも加わり、スケールは大幅にアップ。派手なアクションとファンタズムーンの天真爛漫さもいきつくところまでいった感があり、子供たちに大ヒットしてしまった。
（※1……後に冬木市で起きた『世直し魔法少女連続ニート暴行事件』はこの番組に影響された少女による犯行とされている）
また、ヒロインも含めて女性キャラがいっさい出てこない異色の十一話、二十六話、三十五話の脚本はいまや押しも押されぬ人気作家アキーラ・セオによるものである。

放映スケジュール

『白き月姫ファンタズムーン』
2002年4月1日 - 2002年6月17日 全12話
『白き月姫ファンタズムーン・エクリプス』
2003年4月1日 - 2004年2月24日 全42話（うち六回放送ミスにより未発表）
『白き月姫ファンタズムーン劇場版 ブリーズクエストミー！ 銀河まっぷたつ伝説』
2004年4月1日 公開予定→公開未定。

白き月姫ファンタズムーンエクリプス（仮題）



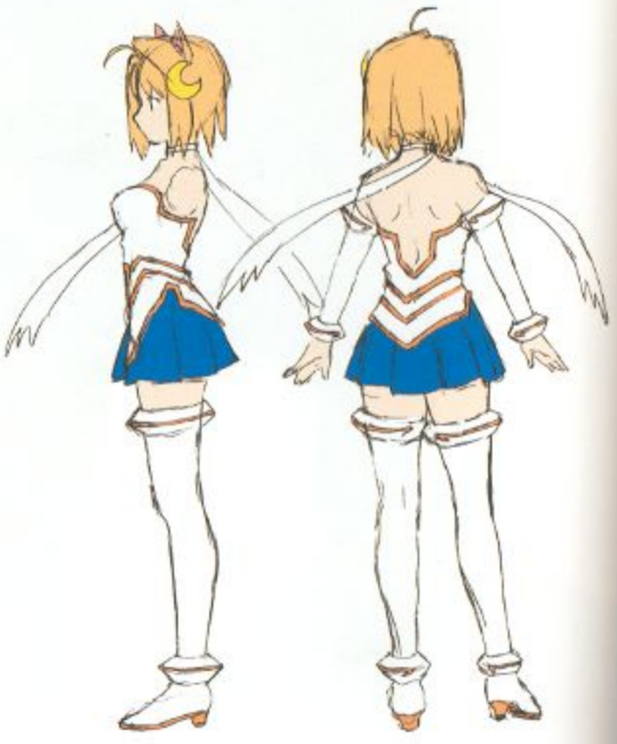
第二期という事でコスチュームも一新。

「前の方が良かった」「下品」
「ぱんつを隠して下さい」などといった
不満の声がファンから上がっている。

ネコミミはカレイドルビーに対抗する為
付けたらしい。

ファンタズムロッドも
デザインを新たに登場！

実はF市在住の新妻モデラー
Mさん（仮名）から
「お、この杖ちょうどいいじゃん！
デザインも月っぽいし」とか言って
強引に奪い取って来た物らしい。



Explanation

魔法少女ファンタズムーン

白き月姫。その正体は誰も分かってはいけない。
ジャンル・不思議系の魔法少女。
……少、女……？　うん、まあギリギリ。
自然干渉を得意とする魔法少女で、天候操作、地層変動、はては星の自転逆行による秩序崩壊系魔法『あ、ちょい今のナシ』まで使いこなす。
また、空中飛行一歩手前のジャンプ力とかクマも一撃の格闘能力を持つも、本人は
「しっつれーい！　これも魔法の力だもーん！」
……などと可愛コぶっているがどう見ても只の力技です、本当に魔法関係ありません。
後に異なるジャンルの魔法少女と出会い、オンリーワンをかけて戦う事に。
夢と希望のファンタズムーンと、力と策略のカレイドルビー。不思議系魔法少女と軍事系魔法少女の意地と人気をかけた大激突だ。
「これだから電波（不思議）系は！」
「ミリオタにつける薬はないわね！」
うむ。一つの駅内に立ち食いそば屋とカレーショップはいらねえのである。

Source

出典／TAKE MOON(武梨えり作品集)より

実物は文句なしに素敵ですので、TAKE MOON読んでください。
志貴はタキシード眼鏡（仮面）って事で、一つ。

Introduction

ミスター・ダウン

聖堂教会のエクソシスト。３０トン級のトレーラーを移動手段にするドライバー。

もう一人の悪魔祓い師と共に田舎町・アルズベリに訪れるが、ダウン本人には悪魔祓いの力はなく、主な役割は“道から外れやすい”もう一人の悪魔祓い師の輸送とされる。

ダウンには攻撃手段も自衛手段もないので、悪魔祓いの仕事はもっぱら輸送している“もう一人の悪魔祓い師”が行っている。

剣のある顔つきだが、穏和で人当たりのいい性格。

エクソシストというよりは学校の教師といった風貌。

もっとも本人曰く、人にものを教える資格がない、だそうで、一人でのんびり生きる方が誰にとっても幸福な事らしい。

静かな平和主義者。アルズベリという戦場に赴く事を承諾しながら、自衛の為ですら銃器は持たない。

血や暴力に弱く、ホラームービーにも弱い。異端者による殺戮現場を見ると途端にパニクって足を引っ張る事から、代行者たちには“一緒に任務につきたくない男・ぶっちぎりで第一位”と恐れられている。

Explanation

覚書

埋葬機関第六位（暫定）。埋葬機関の穀潰し。
（相棒が補充された後は、二人合わせては正式に六位となる）

元、Ｖ＆Ｖインダストリィ第六開発部主任。

技術屋としてはエリート中のエリートだったが、ある事件をきっかけにＶ＆Ｖを退社、事件解決の功績を買われて埋葬機関局長ナルバレックにスカウトされる。

といっても信徒としての在り方は平均よりややドといったところ。聖書を机の引き出しに寝かせておく程度の信心で、それは事件後からも変わっていない。

貴重なタイプのエクソシストで、今のところ、ある条件下において彼の代わりになるエクソシストはいないとされている。

聖母の予言において、生涯で三度悪魔祓いをする、と啓示された。

教会においてただ一人、成体となった悪魔憑きを祓った男。

Source

出典／the dark six(仮名)

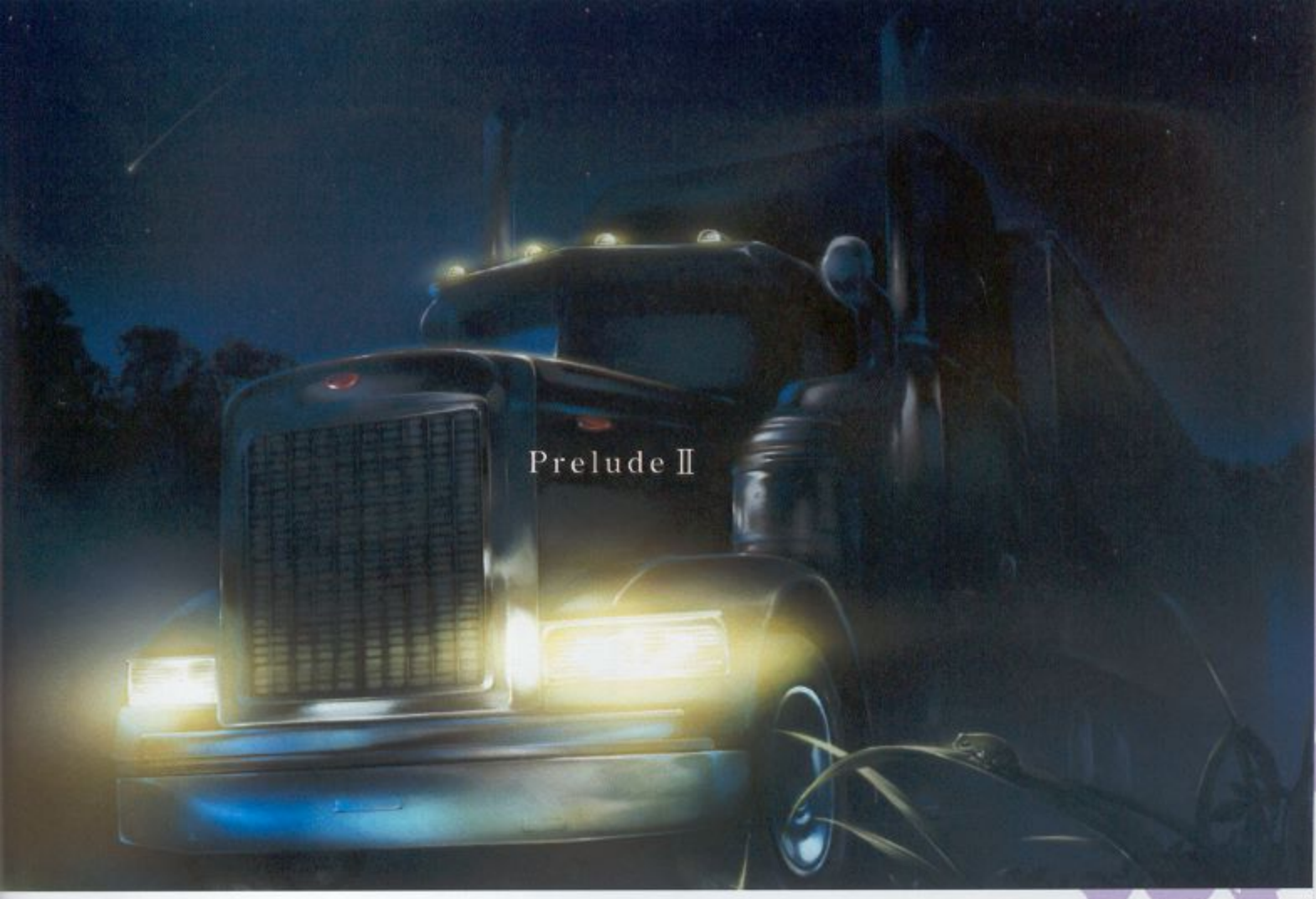
きのこの脳内ゲーム・月姫２における聖堂教会側のキャラクター。

代行者としての秘蹟・異能も、魔術的な素養もない為、一般人サイドの理解者として活躍する。

教会側の人物たちからは「殺し合いに参加しないのだから雑用係として死ね」とこき使われる苦労人。

おもに武器の運搬、調達係として活躍。

ゴキガンだゆ



それは素朴な風景に不釣り合いな、無骨な鉄の塊だった。
総重量35トンを越える移動要塞。こんな片田舎の道には今まで通った事もないだろう内燃機関の荒くれ者。煌々と光るヘッドライトとエンジン音と、ギチギチと音をたてる悪魔の荷台を引きずる大陸横断大型車両（アメリカンモンスター）。
〝悪魔を哀れむ歌（ジャッジメント・ロン・ザ・ベニ）〟
鉄槌と十字架と医療器具、そして〝悪魔祓い〟を搭載した、文字通りの最新鋭の怪物である。
UKに上陸してからこの四日、この怪物が人目を引かなかった事はない。
いや、正しく言うのなら、人々がより驚いたのは〝悪魔を哀れむ歌〟という巨大な車両ではなく、そのハンドルを握る男性の姿にである。無理もあるまい。凶悪なマシンの運転席には、温かな風貌をした神父の姿があったのだから。
神父は田舎道に悲鳴をあげさせながら、慣れた手つきで怪物を走らせる。狭いあぜ道も夜の暗さも気にならない。注意点があるとしたら荷台内の気温ぐらいか。中は常温で安定しているが、万が一にも20℃を下回る事になればすみやかに荷台を放棄し、爆破しなくてはならないのだから。
もちろん、出来るのなら避けたいトラブルだ。
愛車の半分が失われるのはいただけない。田舎の平穏を乱す事とか、荷台内にいる相棒が跡形もなく消し飛ぶのは、まあ、運がなかったと綺麗サッパリ忘れられるのだが。
〝……ダウン。通信、鳴っているのではなくて？〟
荷台内からの内線が響く。
不埒な考え事が見抜かれたのか。その、燃え尽きても別段気にならない相棒の声を聞いて、神父は外線をオンにし、

Explanation

／聖堂教会【組織名】

〝普遍的な〟意味を持つ一大宗教の裏側。
神の教えを説く彼らは、その教義に反したモノたちを認めていない。〝異端〟という存在を表向きでは無いものとして扱うが、中には熱狂的に排斥しようとする者たちがいた。その「異端狩り」が特化し、巨大な部門となったもの。
中でも魔を滅ぼす能力、資格を持つ者は『代行者』と呼ばれ、主の教えに存在しないモノを物理的に排除する。一方、悪魔祓い（エクソシスト）は魔を容認し、これを一時的に退ける聖職者である。

『あ、もしもしミスター？　すみません、追加発注をお願いしたいんですけど――』

ノイズ紛れの受信音に、重苦しいため息をついた。
今回の仕事に就いてから三度目の通信。
必要な器具は一まとめにして発注しろとあれほど言ったのに、この女は悪びれもせず次から次へと我が儘を言ってくる。
おかげで仕事先にはまだ辿り着いてもいない。
やれ粘着榴弾だのM60用弾薬箱を数ダースだの、果ては時代錯誤なポテトマッシャー（埋葬仕様）だの、金も手間も考えずねだられては寄り道が多くなるのも当然だ。
……まあ、もっとも。こんな注文をするのはこの女ぐらいで、自分が役に立つといったらこんな事ぐらいなのではあるが。
吸血鬼には個人携帯用の銃器では効果が薄い。
なにしろ、銃弾を見てから避けるという飛ばし屋なのだ。面の攻撃でなければ掠りもしない為、今もって連中は人喰いである事を謳歌している。
が。この女はそんな連中相手に、点の攻撃であるハンドガンでもこめかみを撃ち抜くブラボーな怪物なのだ。
笑い話一歩手前だが、仕入れてきた品物が無駄にならないのは素晴らしい。それに笑えない冗談は神父が愛すべき物の一つでもある。我が儘の一つや二つ、素直に聞いても罰は当たるまい。
「相変わらずこまった女ですが。唯一のお得意様ですし、仕方ありませんねえ」
トレーラーを停車させ、メモを取る。
意外な事に、今回の注文はそう物騒なものではなかった。
小さな村では手に入らないだろうが、ちょっとしたマーケットがある町なら手に入るものばかりだ。
「はじめの四つは承りましたが、それ以後の物は却下です。だいたいそれ、現地で調達できるんじゃないですか？」
交渉はあっさり終了した。
女はむう、と困りながらも引き下がり、神父はやれやれと胸をなで下ろす。
「では到着予定はさらに二日後という事で。また寄り道をする事になりましたから」
神父は通信を切り、運転席を出る。
たしか、いま注文された品物の幾つかを、荷台にいる相棒が持っていた覚えがあったからだ。
「失礼。入ってよろしいですか、お嬢さん？」
〝――どうぞ。退屈していたところよ、ダウン〟
荷台の扉が開く。
中は夜の闇より暗い。細かに点滅するライトが、かろうじて奥行きを報せている。
闇に眠っているのは銃器と電子、福音と魔の腑。
扉を閉め、中の聖息がこぼれぬよう密閉する。神父は二日ぶりに、寝台に横たわる相棒の姿を見た。
「また、随分と調子が悪そうですね」
〝ええ。田舎の人たちは信心深いから影響を受けやすいの。でも都会よりカタチは綺麗よ。変わりやすいかわりに、痛みはとても心地いいわ〟
それは良かったと満足げに微笑んで、神父は先ほど受けた注文を口にする。
〝え？……ターメ……なんですって？〟
「いや、薬品の一種みたいなものかと。ああ、基本は食用だと言っていましたが、お持ちですか？」
〝……そういったものは持ち合わせていません。私の持ち物で口にできる粉状の物と言えば、花椒粉ぐらいなものです〟
「はあ、そうですか。うーん。それ、どっちも似たようなものだと思うんですけどねえ」
〝……度し難い間違いです。決して同じものだなんて思わないでください〟
相棒はご機嫌ナナメだ。何事も受け流す彼女にしては珍しい事なのだが、あいにく、神父にはそのあたりの機微を感じ取る細やかさは喪われていた。

Explanation

／花椒粉【調味料】

ホワジャオフェン。
炒った花椒をすり鉢ですりつぶしたもの。中華料理の代表的な調味料。特に四川のものは辛く熱く香り高く、舌を刺す程だとか。
言うまでもありませんが、麻婆豆腐には欠かせないアイテムです。

「仕方ありません、諦めて寄り道をするとしましょう。到着は二日後になりますが、耐えられますかお嬢さん？」

〝そうなった時の為に貴方がいるのでしょう、ダウン。それより――〟

ずる、と音をたてて荷台に横たわった何かが動く。

その異形。シンメトリーではない姿に神父は密やかに感嘆する。なんと美しい。血にまみれてなお白い肌。魔に侵されながら魔を慰める、奇形の聖母。

〝――それより、貴方は任務の内容を知っているの？　私たちが出向くという事は、そちらの方も期待できるのかしら？〟

つまり食事はできるのか、と聖母は問う。

「いえ、残念ながら。今回は基本的に吸血鬼退治です。私たちはよほどの事がないかぎり出番はありません。ですが――」

事は聖堂教会だけの話ではない。

今回の件はもう何年も前から用意されてきた一大決戦だ。

教会はおろか、魔術協会ですら〝分かっていながら〟傍観してきたアルズベリの発展。

イギリスの片田舎の村が、わずか十年でプラントを持つ工業地帯に変貌してしまった。

あくまで人間の手だけで。正しい資金と労働によって、商業的に無価値な土地に、時代遅れではあるものの不釣り合いな工場群が建てられた。

残念ながら。その目的が死徒による牧場だとしても、それが善良な人々によって運営される行いなら、魔法使いでさえ手は出せない。

然り。一切の怪異、一切の神秘を用いない〝正しい人の営み〟によって出来た物に、どうして神秘側の存在が手を出せよう。手を出せるとしたら、それはその〝正しさ〟が崩壊した後のみである。

「まったく、誰が考えたものなのだか。地獄が開くと判っているのに、開くまで手出しできないんですからね」

……いや。誰が立案したものか、神父はよく知っていた。

過疎化によって滅びるだけだった村の発展に力を貸し、工場地帯建設に出資したのはV&Vインダストリィ。神父にとっては懐かしの、光溢れる〝我が家（マイ・ホーム）〟である。

〝地獄……いいのダウン？　私はともかく、貴方はただの運搬役でしょう？　そんな町にいたら、あっという間に食べられるわよ？〟

とりあえずは、真っ先にこの聖母に。

神父はまっとうな人間である。

仲間たちのように人間を超越した者ではない。アルズベリを訪れれば、生きて帰れる保証はない。

「まあ、局長直々の命令ですし。それに悪い事だけではありません。なんでもあの村に行けば、自分の名前を取り戻せると預言があったようで」

嬉しそうに神父は語る。自分の名前。ダウンと呼ばれる前の、本当の名前が戻るのだと。

〝？　ダウン、貴方自分の名前が分からないの？〟

不思議そうな声。

はい、と返答する神父。

〝ウソ。貴方の名前は××××でしょうに〟

しばしの沈黙。神父は困ったように、頭痛を抑えるように、片手に額を置いて、

〝ほら。貴方の名前なら、誰だって知って――〟

「いや。今、なんと言ったのですか、お嬢さん（ラガッツァ）」

笑みの張り付いた顔のまま、ゾッとするほど空虚な声で、

「今の響きは、私にはよく聞き取れない。すまないが、私に解る言葉を使ってくれ」

酷く。何か、歪（ひず）んだ声をあげた。

Explanation

／埋葬機関【組織名】

聖堂教会における、より専門的な異端審問の代行集団。

悪魔払いであるエクソシストではなく、悪魔殺しのエクスキューター。他国の退魔組織と協力する事は絶対になく、常に単体で行動する。

完全な実力主義制で、能力があり教会にとって都合の悪いモノを始末するのなら何者であろうと迎え入れる。局長ナルバレックを含めた七人と予備の為のもう一人、計八人で構成される。

ああ、と聖母は祈る。
この男は、まだ帰ってきてはいないのだ、と。
主よ、この魂に憐れみを。
自身の名前だけを取り戻そうとするこの男は、永遠に、自分の名前だけを認識できない狂気にいる。
かつて、彼は地獄にいまし。唯一の生還者となった後も、いまだ、その心は囚われたままだ。肉体だけでなく心も連れ帰ってくればよかったのに。一度抜け出してしまったからには、もう二度と、取りに戻る事はできないだろう。
〝……ダウン。アルズベリには、他に誰が？〟
仕事の話に戻す。神父には、常に狂気を与えておかねば哀れだからだ。
「他に三人ほど。先行している代行者が一人。もう二人の到着は私たちより後のようです」
〝先行者がいるのね。それ、もしかして彼女？〟
「はい。彼女、一番身軽ですからね。今じゃ立派な斬り込み隊長ですよ。加えて、今回の件は何かと因縁があるそうで。彼女、今度こそメッタメタに打ち負かすって張り切っていましたが」
微笑む神父。

◆

――で、遡ること約半日。
中世の町並みと鉄筋の工場が混ざり合った不協の風景を、一人のシスターが歩いていた。
黒髪と眼鏡。頑丈そうな編み上げブーツで、石畳の広場にカッポカッポと足音を響かる。
「ほうほう。西通りには見慣れない人たちが集まる酒場がある、と。二階は綺麗なお姉さんたちがいっぱいいる？……いやですねぇ。日没から夜明けまで、なんて話でなければいいんですけど」
どこまで本気なのか、シスターは観光客を装って街の少年と世間話を繰り広げていた。少年もまんざらではないのか、親切に町の様子を説明する。
「なるほどなるほど、たいへん勉強になりました。これ、お礼です。つまらないものですが」
シスターは換金しやすそうなアクセサリを手渡すのだが、少年はシスターが抱えていた紙袋いっぱいのパンに関心があるようだ。食いしん坊ですねぇ、と笑いあいつつパンを分け合うシスターと町の少年。
「ではさようなら――と、もう一つ聞き忘れていました。ね、この町に大きな食堂はありますか？　異国情緒ゆたかな、節操なく色んなメニューを集めたような。具体的には、こういう料理があるかどうかなんですが」
返答は潤りがちに。
期待に満ち満ちたシスターに、少年はどう答えたものかと途方にくれるのであった。
そうして、絶望的な少年の返答から数分後。
宿に戻ったシスターは、淀みのない動きで通信機を手に取って、
「あ、もしもしミスター？　武装の追加発注をお願いしたいんですけど。
ターメリックとコリアンダーとクミンとレッドペッパー。もちろん自分用のガラムマサラは持参してますから、そちらは結構です。あと人参と玉葱と林檎と牛肉。え、それぐらいは現地調達しろ？　……むぅ、仕方ありません。譲歩しますから、香辛料は多めに、できるだけ高価なものを。あ、領収書は局長名義で、ひとつ」

Explanation ／シスター【用語・人物名】

ダウン遠より一足先にアルズベリに潜入した代行者。人当たりのいい笑顔と、どんな環境だろうとすぐさま順応する社交性をもった、埋葬機関きっての人徳者。
外交に諜報にと、なんでもかんでも一番手として重宝されている。勿論、〝試験は耐えよ、恥辱は絶えよ〟という埋葬機関のモットーは染みこんでいるので、いざ事が始まれば編み上げブーツで華麗なステップを披露する。
……あと、こーゆー芸風もいいかげん如何なものかと思うんだ。

Introduction

ロード・エルメロイⅡ世

プロフェッサー・カリスマ。
マスター・V。
グレートビックベン☆ロンドンスター。
女生徒が選ぶ時計塔で一番抱かれたい男――等々、様々な異名を持つ時計塔の名物講師。
本人は大魔術師と宣言してはばからないが、魔術師としてはどうしようもないほど平均。
が、講師としての手腕はズバ抜けており、他人の埋もれた才能を見抜き、鍛える事にかけては時計塔随一の人物だったりする。
彼の生徒になって王冠（グランデ）の階位を得なかった魔術師はおらず、彼が教え子たちを集めれば時計塔の勢力図が変わるとまで言われている。
もっとも本人にそんな野心はなく、
「笑い話にもならん。いまだ四階級どまりのこの私が、なんで他人の面倒を見てやらなきゃいかんのだ」
とまあ、こんな感じで教え子たちとは関わりたくもないらしい。
魔術師見習いだった頃の彼は絵に描いたような“自分を天才と疑わないナルシスト”だったのだが、十数年ほど前のある事件をきっかけに改心し、以後は困ったちゃんなりにも努力を重ねた結果、プロフェッサーなどと呼ばれる事に。
他人をプロデュースする事に関しては当代一の傑物だが、エルメロイⅡ世にとってはそんなものはどうでもいい事。彼本人は魔術師として大成したいのだろう。
そんなワケで、講師として大人気の自分にはまったく興味がない。
……むしろその事実にイライラしている為、ここ数年は常に不機嫌そうに院内を歩いているのだとか。

Explanation

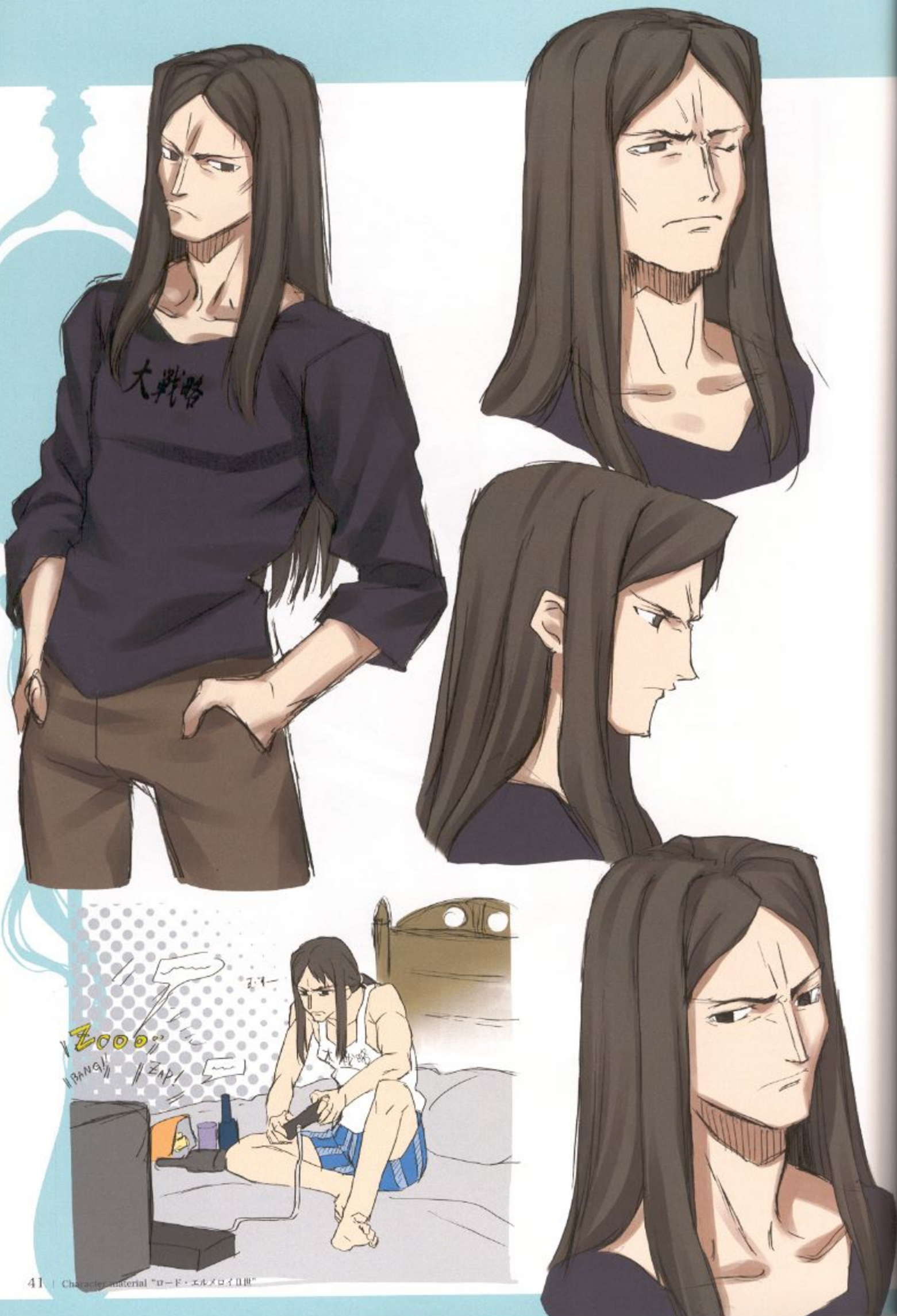
その正体

ロード・エルメロイⅡ世というのは彼の本名ではない。数々の異名同様、不本意にも襲名したものである。
もともとはロンドンにおけるロードの一人、ケイネス・アーチボルト・エルメロイ門派の魔術師見習いだった彼は、ケイネス卿の死後、色々あって没落一歩手前になったエルメロイ派（アーチボルト家）の復興に尽力した。
事が落ち着いた後、『アーチボルトを持ち直した男』『新なるエルメロイ』としてエルメロイⅡ世などと呼ばれる事に。
無論、正式なエルメロイの跡継ぎは他にいる。
当時は幼く、アーチボルトの末席にいた少女がそれだ。彼女はアーチボルト家を建て直した功績と、もとを正せばおまえが悪いんだから一生私に仕えよ、という事で彼にエルメロイⅡ世という名を与え、縛ったのである。

Source

出典／？？？（未発表）

しいて言うならFate/stay night。
どの話であろうと、舞台がロンドンよりになるとちょこっと顔を出す。
遠坂凛がロンドンに留学した後、後継人になるのはこの人。その条件は「私は君にいっさい魔術の指導はしない。まあ、他の学課への推薦状ぐらいは書いてやる」というものだった。
日本も日本人も大嫌いなのに、唯一の娯楽は日本製のゲームというあたり、根は憎めない小市民。
ゲームオンチな凛に、
「君はアレかな。ほら、あの街には詳しいのかな。ウエノとかアサクサとか、そのあたりに近い街の話なんだが……」
と内心ワクワクしながら話を振るも、凛にアキハバラどころかニホンバシすら興味がないと即答され、
「ファック！　オマエは最悪の日本人だ！」
と逆ギレするのであった。
冬木市における聖杯戦争を解体した人物。


大戦略
ZOOO...
BANG!
ZAP!

モードレッド

“決して、その兜を外してはなりません――”

アルトリアの姉、ギネヴィアの子。
（伝説ではアーサー王とギネヴィアの間に出来た不貞の子とされる）
ギネヴィアの推薦だけを持ってキャメロットに訪れ、卓越した剣技を披露して円卓の騎士の一人となった仮面の剣士。出自が不明ながらも剣を与えられたのは、その能力とまっすぐな騎士道精神ゆえ、と言われた。
Ｆａｔｅではギネヴィアがアルトリアから作ったクローンという設定。
（ホムンクルス。劇中で説明する必要はないが、わりと正真正銘のアルトリアの息子。擬似的に男性となったアルトリアをギネヴィアが魔術で幻惑し、精子を採って自分の卵巣で育てた）
『私の息子である貴方には王位を継承する資格があります。今はその身分を隠し、王に仕えなさい。そして――いずれ王を倒し、その身が王になるのです』
という母の妄念を一身に背負っていたが、モードレッドにはその野望より先にアーサー王への憧れがあった。

モードレッドはホムンクルスである為、成長速度が人間より早く短命。
いびつな出生の自身を恥じ入り、無意識にまっとうな人間への嫉妬心を持っていたものの、子供特有の純真さで“完璧な王”であるアーサー王を崇拝していたのだ。
人間嫌いを隠しながら、絵本の中にしかないような騎士道を守り、正しい騎士であろうと日々努力するモードレッド。
が、その純真さもギネヴィアによって打ち砕かれる。
いっこうに反逆心を抱かないモードレッドに、ギネヴィアは出生を明かしてしまったのだ。
モードレッドはアルトリアとギネヴィアの間に出来た不貞の子供である事。
アーサー王はモードレッドが自分の子供だという事を知らないし、知ったとしても、そんな汚れた子供は認めないだろう、という事を。
モードレッドはショックを受けるも、同時に歓喜に包まれる。

自分はまっとうな人間ではないが、あの王と同じ血を持つ子供なのだ。否、あれほど人を超越した王の息子として、人間でない事はむしろ誇るべきこと。名実共に、心身共に、自分は王の跡継ぎに相応しいのだと。

喜びいさんで王につめよるモードレッド。父のいなかったモードレッドにとって、アーサー王はもはや神に近い“父”の姿だったからだ。

しかし、アルトリアははっきりとモードレッドを拒絶する。

『なるほど。姉の奸計とはいえ、確かに貴公は私から生まれたもの。だが、私は貴公を息子とは認めぬし、王位を与えるつもりもない』

アーサーは姉ギネヴィアを嫌っている。その子供である自分が、どうしてアーサー王に認められようか。

『そうか……なぜ私が末席であったのか、ようやく分かった』

どれほど努力しても。誰より優秀になっても、ギネヴィアより生まれた時点で、王は自分を一生薄汚れた子供と蔑むのだ。

今までの愛情が大きかった故か、拒絶されたモードレッドの憎悪は燃え上がる。

結果として円卓の騎士内部からアーサー王への不信感を広めていき、アーサーがローマ遠征にいった隙にキャメロットを掌握。

長い戦いで疲れ果て帰還してきたアーサー王を、国をあげて責め立てる反逆の将となる。

アーサー王憎し、王座は私こそ相応しい、と猛るモードレッドだが、その本心はアルトリアに認めてもらいたいだけ。ただ、王に息子と呼ばれたかっただけだった。

最後の戦い。

お互いの軍が死に絶え、剣の丘で対峙する二人。

『見たかアーサー王。貴方の国はこれで終わりだ。私が勝とうと貴方が勝とうと――ご覧の通り、もはや全て滅び去った』

こうなる事は分かっていた筈。私に王位を譲ればこんな事にはならなかった。そんなに私が、ギネヴィアの分身である私が憎いか、と叫ぶモードレッドを、アーサー王は無表情に言い放つ。

『私は貴公を憎んだ事は一度もない』

『貴公に王位を譲らなかった理由はただ一つ。

――貴公には、王としての器がないからだ』

激情にかられて走るモードレッド。

（伝説ではアーサー王の槍がモードレッドを貫くも、最後の力でアーサー王に致命傷を与えた、とされる）

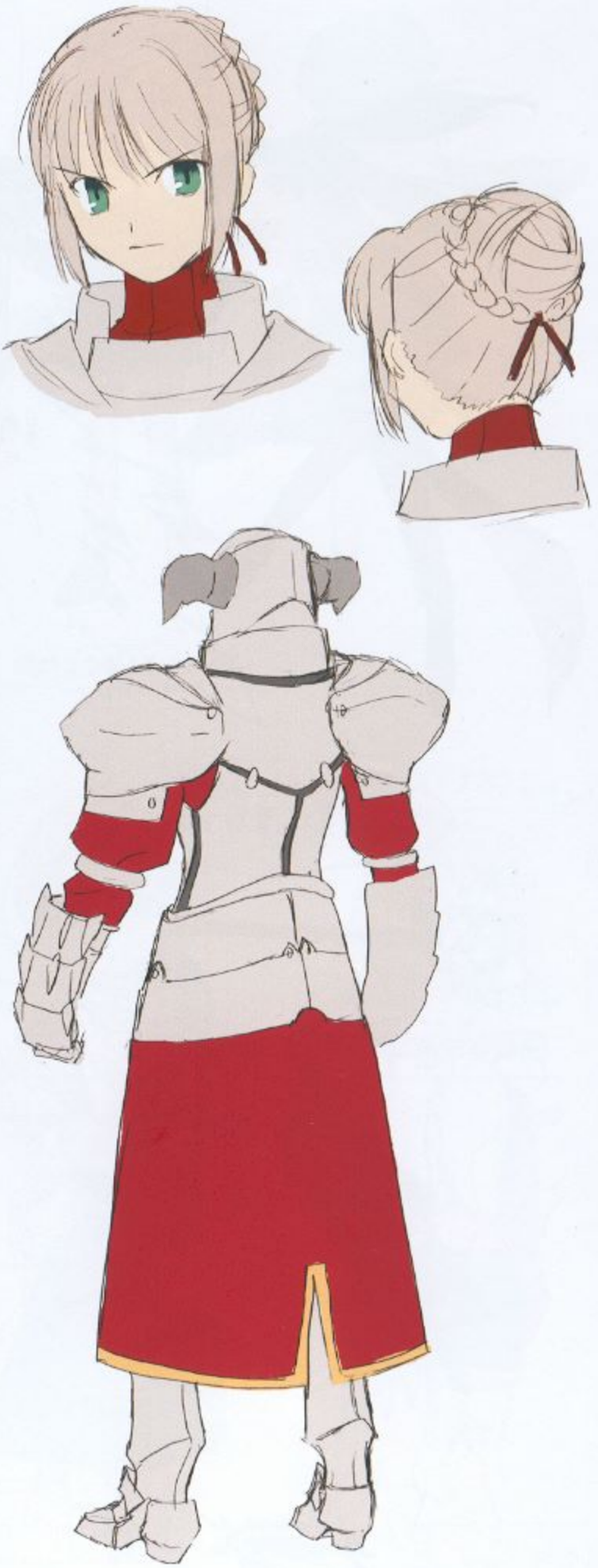
一騎討ちの末やぶれ、槍に貫かれたまま崩れ落ちるモードレッド。

“決して人前で外してはなりませんよ――”

そう母に言いつけられていた仮面から解放され、アルトリアとうり二つの素顔をさらしたまま、

『――父、上』

せめて一度、王に触れようと血に濡れた手を伸ばしたまま、かなう事なく崩れ落ちた。



Source 出典／アニメ『Fate/stay night』

『Fate/stay night』内における、アーサー王伝説の終わりを告げる騎士。実は女の子だったアーサー王、なんて無茶を通したFateの芸風に漏れる事なく、無茶あふれる設定になっている。

上のテキストはアニメ化の際、カムランの戦いの資料が必要になったので書き起こしたもの。

『Fate/stay night』発売当時から“セイバーはどのような男装生活を送っていたの？”という疑問に、ちょっとだけお答えできたでしょうか？

Kaleido-Ruby SCHWEINSTEIN

Introduction

カレイドルビー・シュバインシュタイン

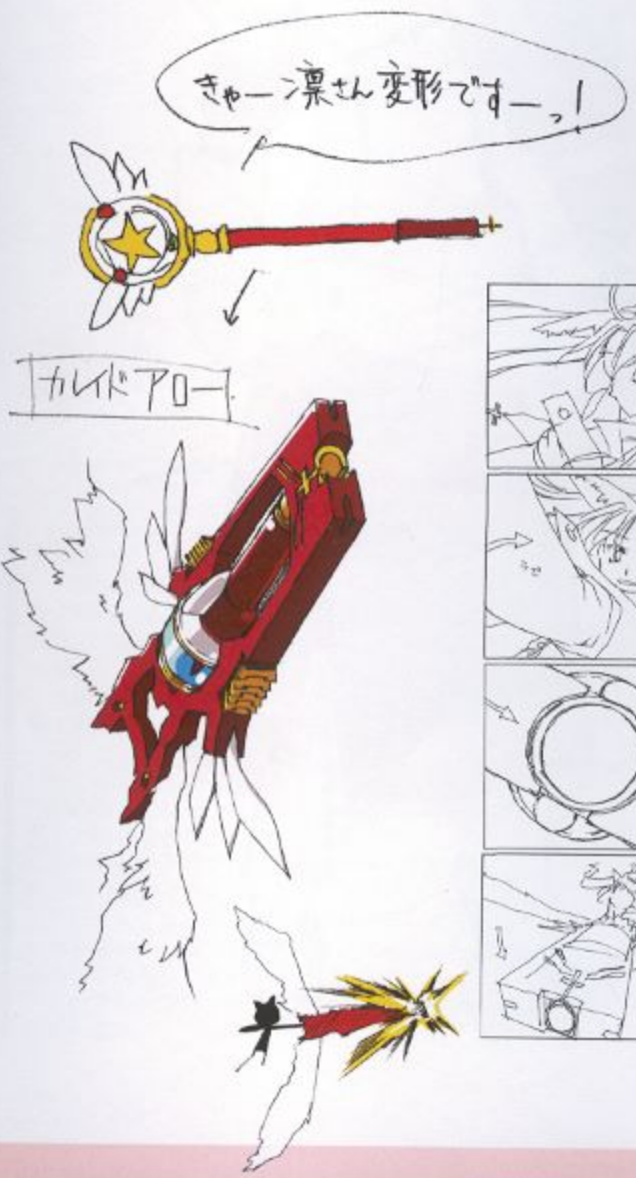
新たなる敵を前にし、パワーアップを遂げたカレイドルビーの姿。

カレイドステッキと宝石剣ゼルレッチを融合させた悪夢の武装形態である。

カレイドアローは戦闘機なみの飛行能力と、圧縮した魔力弾を撃ち出す熱線狙撃銃式(ガーレット・ドゥルアンス)を兼ね備えたルビーちゃん秘密装備の一つ。その威力は６００メートル先の移動要塞車両・ベンガルティーガーの装甲をも貫通する。

まさにジェノサイドフィーバー。凛さん変形ですーっ、なんて可愛く言っても騙されませんが、なぜかこの兵器で壊せるのは無機物のみ。この銃の余波で高度３０００フィートから投げ出されようと、生物であるならどうあっても死なないのであった。

このあたりまでくるとカレイドルビーもかなりノリノリで魔法少女ぶっている。人間、慣れてしまえば何事も楽なのであった。



Explanation

『無限妖精カレイドルビー』

（※作品タイトル）

『白き月姫ファンタズムーン』としのぎを削りあった魔法少女アニメ。どちらが裏番組であったかは不明。

並行転写プリズムロッド・カレイドステッキによって愛と正義の魔法少女となったある少女の、正義と鉄槌と大勝利の物語。

自分の世界を平和にした後、並行世界をみょんみょんとスライドしていく魔法特性を生かし、いろんな世界に顔を出すコトに。

しかし、世の中そう旨い話はありません。自分の世界から離れた彼女は主役のライバル役としてしかキャラ立てができなくなり、どんなに強くっても貴方の為に戦ったんじゃないんだからであり、つまるところツンとかデレればいいんじゃない？

Source

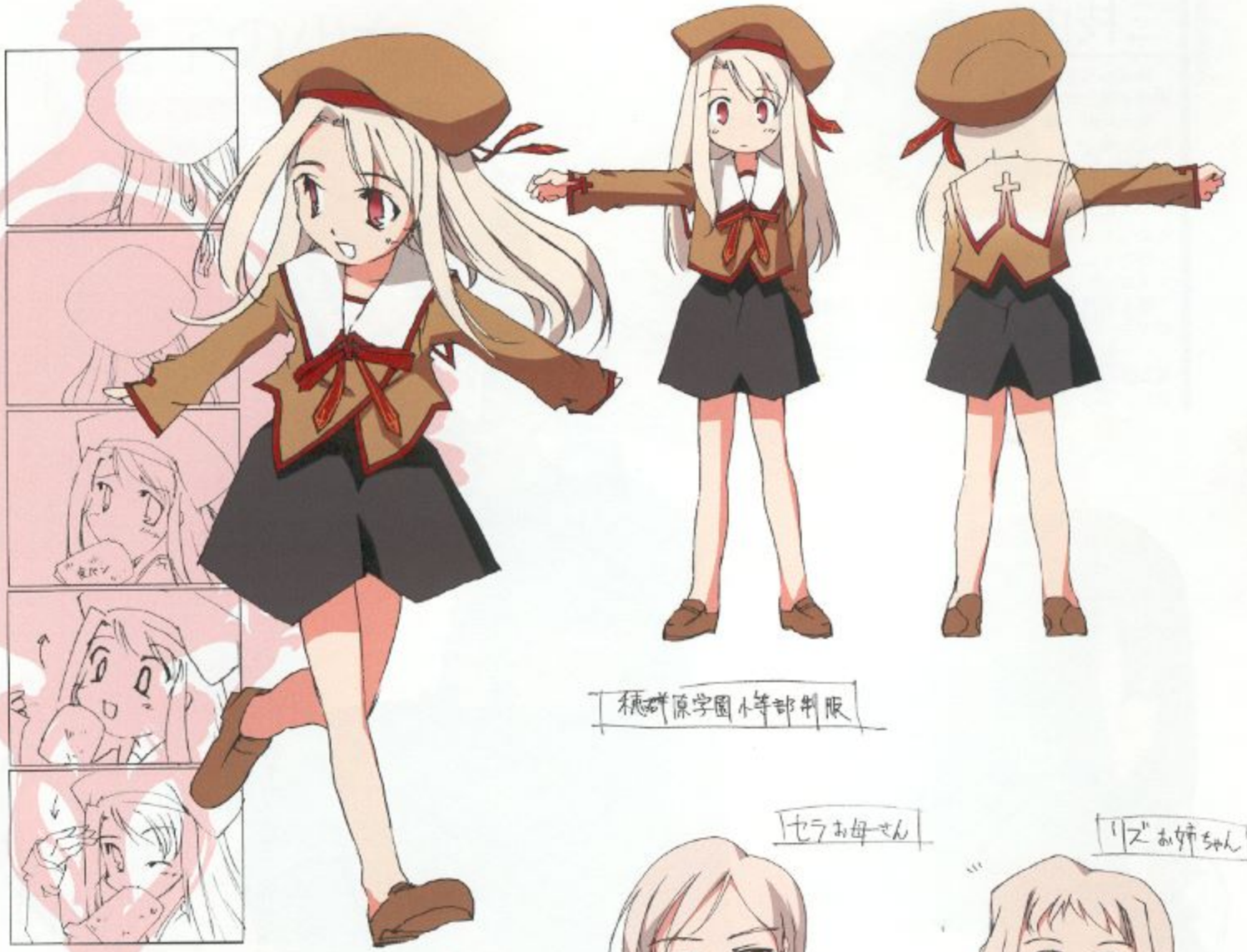
出典／鴨はうすの物置より回収

TYPE-MOONにおける演出・スクリプト職人つくりものじ氏がこっそりと、単なる気紛れで走り書きしていたスピンアウト企画。

あまりにこっそりだった為、本人も翌日にはすっかり忘れ、長く放置されていた。

氏の机にはこの手の落書きが無造作に置かれ、時にためらいもなく捨てられる。勿体ないってホント

Illyasviel von Einzbern



穂群原学園小等部制服

Introduction

アインツさん家のイリヤさん。

穂群原学園小等部に通う、ドイツからやってきた女の子。

もはや言葉による説明は不要。セラお母さんやリズお姉ちゃん、そしてお嬢さまイリヤの愛らしさにどうにかなってほしい。ボクはどうにかなった。

第一話ではカレイドルビーの犠牲者として事件に巻き込まれるが、言うまでもなく、真のヒロインは彼女である。

Explanation

絵コンテ

タイアップ企画だったのか、どうやらアニメ化も決定していた模様。

ページにうっすらとちりばめられているのはその断片だ。宇宙空間での艦隊戦、アインツさん家の朝の一コマ、そして強襲するカレイドルビー――まさに、どのような物語が始まるのか想像すらできない超コンテと言えるだろう。ほんと、マジ想像できない。

Explanation 02

出典／鴨はうすの物置より回収

没企画の一つ。タイガー道場の延長として考えられたもの。言うなればタイガー道場劇場版だが、ここまでくると師匠関係なしでヒジョウとしてやってほしい。

あと、セラお母さんの可愛さは異常。

Introduction

三枝由紀香

ほにゃっとした笑顔がトレードマークの、穂群原学園女子陸上部のマネージャー。

友人の蒔寺楓、氷室鐘とあわせてFate三人娘と呼ばれている。

TYPE-MOONでは珍しい、純粋な癒し系クラスメイト。保護対象にしといてください。

三人娘の中では一番幼く思われがちだが、芯に強いものがある本当の意味での優しい子。

弟たちにはいいお姉ちゃん、友人たちには愛すべきマスコットとして親しまれている。

陸上部員たち曰く、「由紀っちは人を喜ばせる天性のマネージャー」だそうで。

……最近、弟たちの友人である金髪のお子さまから、覚えておいて損はないから、と花札を教えてもらったとか、なんとか。

Source

出典／『Fate/stay night』

２年Ａ組の女生徒として登場。

その他、魔法少女界では世間を騒がす怪事件が起きると高確率で場に居合わせたり、人質になったりする。

チラシの裏だが、マキジや氷室と同じ会社のＯＬになってくれたりすると幸せすぎて死ぬ。我々が。

善良なる人々なくして、物語は語られない。

そんな、主役たちを奮い立たせる大切なファクターの代表として登場していただきましたさ。

帽子の少女

クラス	一年B組
所属	スーパー合気道部、秘境料理研究会
好きなこと	部活、ひと昔前のカンフー映画
苦手なこと	恋愛相談、年上の女性
好きな食べ物	中華まん、いつかどこかで食べた真っ赤なマーボー
苦手な食べ物	サプリメント、いつかどこかで食べた真っ赤なサンドイッチ
趣味	野球、サッカー、コンフー
将来の夢	おいしい中華料理のお店をひらく
尊敬する人	パンダ師匠
血液型	O型
誕生日	5月4日

Source 出典／スピニングTM

???

Introduction

魔法のお手伝いさん マジカルアンバー

ファンタズムーンにて登場する魔法少女。
ある時は味方（のような敵）、
ある時は頼れるいい人（っぽいけど敵）、
そしてまたある時はどこからどう見ても敵、
という、いつもほがらか、笑顔がキュートなお手伝いさん。……何者なんだ、いったい。

キャラ的にファンタズムーンと同じタイプだが、分かり合える事はたぶん一生ない。出会ってしまえば楽しげな会話が繰り広げられるが、その実、言っているコトがまったく噛みあっていない二人である。

全身を覆う黒フードがトレードマーク。ご町内を騒がせる魔法少女を激写すると決まって黒いフード姿が写ったりするが、

「いやですね、それは心霊写真ですよ秋葉さま。たまたま、そこいらにいる自爆霊が写っただけかと。はんと非科学的ですねー。あ、ちなみに私でしたらその日はお屋敷で志貴さんとお掃除を――」

等々、にこやかにアリバイを提出するのであった。

フード取った状態

尻尾は着物の上からついてるらしいです…

Explanation

おもな能力

魔法少女属性／黒幕。

相手が真面目であればあるほど強くなる、という人を食った魔術系統。ただし真剣に正気じゃない相手には効果薄なのであしからず。

ホウキに乗って空を飛ぶオールドスタイルの魔法少女。……アレ、それって少女じゃなくて魔女なのでは、というツッコミはスルー。

言葉巧みな言語療法と、力技とも言える投薬治療が得意技。数々の怪人たちのスキルを研究していたのか、黒鍵を模した注射器やすごい中国拳法も使いこなす。

ちなみにメカ作ったりはできません。そーゆーのは善意の協力者（住所不定の錬金術師）をムリヤリ働かせて作らせるのです！

ちなみに、当主さまには常に弱いが、最後の一線では強いという微妙なパワーバランス。

一方、長男（養子）さんには常に強いが、最後の一押しで弱くなるんだって。

あ、本当の長男相手には常時最高（マキシム）に鬼ですよ？

Source

出典／スピニングＴＭ

スピニングＴＭを作っちまった原因にして、記念すべき一人目のＴＭ魔法少女。

他の並行世界では善の魔法使いによって倒され、彼女をモデルにした魔術礼装が作られたとかなんとか。どうなんだ、そのへん。

初めて存在が確認されたのは歌月十夜から。

最近では「とびつきひめ」という並行世界で黒猫と一緒に大活躍しているとか。ありがとう、あんなバカネタに最高の形で応えてくれてありがとう01stepの方たち！

デザインはファンタズムーン同様、漫画家の武梨えり氏によるもの。

琥珀＝キツネというヴィジョンはもうシャッポを脱ぐしかない。基本悪役なのに、他のどの魔法少女より魔法少女らしいところがもうどうしようもなく愛を感じる。

Introduction

石杖アリカ

いつも気だるい、自虐的だけど前向きな悪魔使い。
慢性的な記憶障害。中心にいない主人公。一人でないと生きていけない弱い生き物。
大抵の事は肯定するが、一つのものを二人で分ける、という行為には難色を示す。
片腕を食べられた後、“脅威”という精神反応を亡くしてしまった為、誰がどう見ても危険な状況にひょこひょこ歩いてしまう。
結果、関わらなくてもいい厄介事に付きあうハメになる、典型的な主人公気質。
毎話、事件の始まりにあたる鍵。
使用後は用済みなので、ポケット等に仕舞ったまま、ずっと忘れてしまいましょう――

Source

出典／ＤＤＤ

ＤＤＤの主人公。各話の主人公ではありません。
気持ちのいいやさぐれっぷりを目指して、今日も悪態つきながら生きています。
『Fate/hollow ataraxia』のメインの一人、アヴェンジャーと基本設計を同じにするが、向いている方向は真逆。アンリが外に向かう人なら、アリカは内に向かっている。

Karyou Kaie

Introduction

迦遼カイエ

地下室の悪魔。性悪。残酷無情。ひとでなし。
少女のような容姿をした少年。一人では生きていけない強い生き物。
感情豊かで、世に愉快な事あらばケラケラ笑い、世に悲しい事あらば天使のように微笑む。
感情の名を冠した義肢を持っている。
ちなみに、いつもソファーで眠っている黒犬は『憎しみ』に反応してワンワン鳴きます。
それなりの事はできるが、結局のところ自分だけでは何もできない。
人間嫌いだけど、寂しいと死んでしまう。
曰く。神が完全無欠で全知全能なら――――悪魔は、荒唐無形で人知無能でなければならない。

Sourte

出典／ＤＤＤ

月姫のメレム・ソロモンと何かと相似点を持っているが、直接的な繋がりはない。ＤＤＤ自体、月姫、Fateとは接点のないお話です。
月姫、Fateは根本的にポジティブでしたが、ＤＤＤは全体的にネガティブより。
しかし、そんな暗い芸風はこやま氏の描くカイエの妖しい可愛さの前には無力なのであった。誰だよコイツ男とか設定したの！　と鏡に向かって怒鳴る菌糸類であった。

いやいやいやいや

Introduction

干将莫耶オーバーエッジ

『Fate/stay night』の一ルート、『Heavens feel』におけるブラックセイバーＶＳ士郎の戦い。

あの戦いで士郎は干将莫耶を最大用法したが、それを正統な持ち主であるアーチャーが行うとどうなるか？　その答えがこの干将莫耶である。

連続投影のラスト、三度目の投影の際、アーチャーの強化によって干将莫耶はこの形態となる。

アニメ版でアーチャーＶＳバーサーカーが映像化されるとの話になり、それならばと、こやまさんにデザインしてもらった一品。このデバ包丁じみた物騒さにラブなのです。

また鶴翼三連は三つの×の重ね当てであり、正しくは飛んだり跳ねたりはしません。念のため。

Gransurg Blackmoa

Introduction

グランスルグ・ブラックモア

黒翼公。
オーストリアに居を構える死徒二十七祖の一角。
本名不明。出身も名前も長い年月の末に破却した。グランスルグ、ブラックモア、共に彼の在り方からついた異名にすぎない。
多くの眷属を有し、大がかりな儀式には欠かさず足を運ぶ社交的な大吸血鬼。……なのだが、どうにも他の祖たちからは疎遠に扱われている。
吸血鬼に噛まれ、血を送られた人間は吸血鬼になる。だがブラックモアの場合、彼に血を吸われた人間はみな鳥の頭と翼を持つ怪物と化してしまうのだ。
人としての体裁を保たない彼の姿と、鳥と人の合成（キメラ）と化す眷属たちが優雅さに欠ける為、他の祖たちはブラックモアを蔑んでいるのだろう。
（ブラックモアに言わせれば、人の姿をしている時点で他の死徒たちこそ優雅さに欠けているのだが）
黒翼公という肩書きは皮肉からきたもので、現・死徒の王たる白翼公と対比したもの。
最初にして高貴たる白い翼の君とは似ても似つかない、黒い羽の厭使い――というのが死徒世界におけるブラックモアの扱いである。
反面、実力・歴史ともに白翼公に双肩する死徒なので、面と向かって彼に皮肉を言えるのは二十七祖の上位ぐらいなものであるが。

Explanation

生前

生前の彼は鳥を神聖視する魔術師だった。
鳥のフォルム・内部構造を溺愛し、彼らこそこの星の王であると謳い、彼らの為により住みやすい世界（そと）を作り上げようと生きていた。
魔術世界において、鳥は“死後の魂を運ぶもの”として扱われている。その偏執的な思考はどうあれ、鳥を己の魔術基盤におくグランスルグは優れたソウルキャリアーであった。
しかし。その偏執が朱い月に見初められたのか、戯れに戦いを挑まれ、敗北。
魔術も並、保有する血にも目を引く要因はなかったグランスルグはあっさりと殺される――筈だったのだが、最後の最後である偶然に助けられた。
その偶然を良しとした朱い月はグランスルグを見逃し、血袋（ぜん）として用は成さないが、以後は自分付きの魔術師として生きよと命じるのだった。
人間として破綻しているものの礼節を重んじていたグランスルグは心身共に朱い月に忠誠を誓い、自らの手で死徒化の道を歩む。
魔道の果てに吸血鬼となった彼は、『主に仕えるのでしたら、それに相応しい姿になりましょう』と自の姿を“鳥”に変貌させていった。
朱い月に仕えていた頃の彼は死徒というより使い魔で、よく朱い月の為に働いたという。

Explanation

ネバーモア

彼は二十七祖たちが真祖たちから離反した後も朱い月に仕えていたが、朱い月がゼルレッチによって霧散した後は死徒として自律した。
１６位を名乗っていた祖の居城に堂々と攻め入り、この一族を壊滅、以後はブラックモアと名乗る。
もともと朱い月存命時から“二十七の一つ”と認められていた彼であるから、他の祖もこの襲名を認め、ブラックモアはようやく本来の能力に相応しいタイトルに落ち着く事になった。
この襲撃のおりに使われた固有結界がネバーモア。
宙（そら）を覆う死羽の天幕、月も星も飲みこむ、絶対無明の“死の世界”である。

“――気をつけたまえ。
我が夜に舞う鳥たちは、死者にのみ厳しいぞ――”

そう宣言し、ブラックモアは一つの祖とその派閥を壊滅させた。
一切の流血もなく。城壁も庭園も、カーテン一つ傷つける事なく、百を超える吸血鬼たちを皆殺しにしたのである。

Source

出典／the dark six(仮名)

月姫２（脳内）における死徒側のキャラクター。
トリ紳士、吸血ガッチャマン。
メレムが死徒サイドと教会サイドに理解のある吸血鬼とすると、彼は死徒サイドと魔術師サイドに理解のある吸血鬼。
祖としての誇りなんぞより、朱い月の威厳を守る為に参戦する。
狂言回し的なトリックスターではあるが、実力は化け物揃いの月姫２の中でもトップクラスに位置する。

Merem Solomon

Introduction

メレム・ソロモン

埋葬機関の五。二十七組の二十位。シエルにとってイヤな先輩。古今東西の秘宝のコレクター。
埋葬機関に所属しているのも、教会が封印している秘宝の近くにいたい為、とされる。

もともとは動物と心を通わせ、人の願いを具現化する神子（星の端末）で、決して村の外に出ないよう、手足をもぎ取られて祭り上げられていた。
手足を切断したのは神子は人のカタチをしていてはならないという信仰と、単純に、こんな便利な道具を逃がさない為。

（某アンリマユと境遇こそ同じだが、こちらは本当に神子であったワケだ）
メレムはそうして死ぬまで村人たちの慰めモノとして生涯を終えるところだったが、偶然通りかかった朱い月に見初められる。
『人々の願望をカタチにする異能』を愉快に思った朱い月は、村人たちに夜が明けたら皆殺しにする、と宣言。命が欲しいのなら汝らの願望で私を殺してみよ、とゲームを開始した。
村人たちの“死にたくない”という願望は実に醜く、強大だった。
それを実行に移すメレムへの負担もかまわずに、村人たちは次々と“都合のいい神獣”を想像し、朱い月

に挑ませる。
　無論、そんなものが朱い月に敵うはずもない。
　村人たちの願望は果てがないが、夜明けまであと少し、というところで願望をカタチにするメレムが限界を迎え死亡。残った村人たちはメレムと朱い月を呪いながら死んでいった。
　……その後。
　地平線に太陽が昇りだした黎明時に、朱い月は息絶えたメレムに口吻を与え、死徒として蘇生させる。
“戯れだ、好きに生きるがよい。己が手足の代わりなぞ、汝は幾つも描きあげてきたであろう。元となった願望は醜悪であったが、汝の描いた相は名画であった。――――あれほどの偶像ならば、汝の手足を担うに相応しいと想うのだが”
　朱い月の言葉に魅入られたのか、メレムは『村人たちの信仰が作り上げた』聖堂から四つの偶像を思い描き、彼らに自身の手足の能力を付加させ、はじめて人型として地面に立つ。
　以後、朱い月に憧れに似た感情を抱き、朱い月――――ブリュンスタッドにのみ忠誠を誓う死徒となった。
　二十七祖が真祖側から離反し、朱い月が崩御した後は隠遁を決め込んでいたが、何を思ったのか敵である聖堂教会に所属する事になる。

Explanation

デモニッション

　メレムの持つ異能。第一階位の降霊能力。
　具現化できるのは他人の願いだけであって、自分の願いではない、というのがミソ。いかに強力な能力を持っていようと、自分一人では何もできない、というのがメレムの在り方。まさに悪魔そのものである。
　空想具現化に近いが、メレムの悪魔召喚は人々の願望をモデルにし、それをメレムの憧景（ゆめ）によって彩色し類似品を作る、というもの。
　悪魔たちの能力は人々のイメージにそったものだが、その造形はメレムのイメージによって形づくられ、能力の大小はメレムの魔力によって変動する。
　メレムはその性格上、現実的・打算的な悪魔の具現化は得意ではない。
　彼はあくまで空想の世界に生きるピーターパンなので、得意とする絵、描きたい空想は“童話に見るような悪魔”なのである。

Source

出典／月姫読本・talk

　月姫から数年後の、ちょっとしたエピソードに登場。
　一人怪獣大決戦。ソロモン王とは名前ぐらいしか関係ありません。
　あくまで予定であり空想だが、the dark sixでも登場予定。……ほんと、どんな話になるんだ一体……。

Introduction

四大魔獣

フォーデーモン・ザ・グレイトビースト。
二十七祖の一角でありながら埋葬機関に所属する死徒、メレム・ソロモンの手足たる使い魔。
一体で一つの祖に匹敵する、と言われている。
それぞれが神獣クラスの空想上の生き物だが、さもありなん、全てメレムが“文字通り”想像した、四大の悪魔たちだ。
地上のいかなる生態系にも属さないが、しかし、地上のあらゆる生物へのオマージュである。

Source

出典／月姫読本・talk、the dark six

死徒メレム・ソロモンに従うボスクラスのモンスターたち。talkでは右足の悪魔が登場。いいようにやられていたが、思考林と鯨犬との相性は最悪だったという事で。
また、名前がないのは“悪魔を安易に名付けてはならない”という決まりから。メレムもカッコイイ名前をつけてやりたいらしいが、名前をつけてしまうと本当に自由になってしまうので出来ないらしい。

Explanation

左手の悪魔

クラス：ネズミの王さま。
ユーザー要求：他人への憧憬、変身願望の具現。
デザイン参考：聖堂の天井裏に住んでいた友人たち。

ネズミ界のヒーロー、アイドル。
戦闘能力は皆無だが、人間であれば完璧に姿を模す、という変身能力を持つ悪魔。
人間社会において司祭としての地位を持ち、かつ、この世で三番目ぐらいに美しいネズミとして、地下、天井裏、排水溝、家具裏、といった隙間の隙間コミュニティにおいて絶大な支持を持つ。
“左手”自身も司祭としての自分が気に入っており、メレムと人間とネズミたちの為に、日々のんびり働いているのであった。
「……おっかしいなあ。君、人間好きって設定だったっけ？」
「ワタクシ、ピッツァがある限り人間の味方をいたします」
などとメレムとやりとりをするチーズ好き。
また、ネズミたちに
『ねーねー、キミのどこが“大”魔獣なの？』
とつっこまれる度、申し訳なくて頭を悩ましているとか。

Explanation 02

覚書

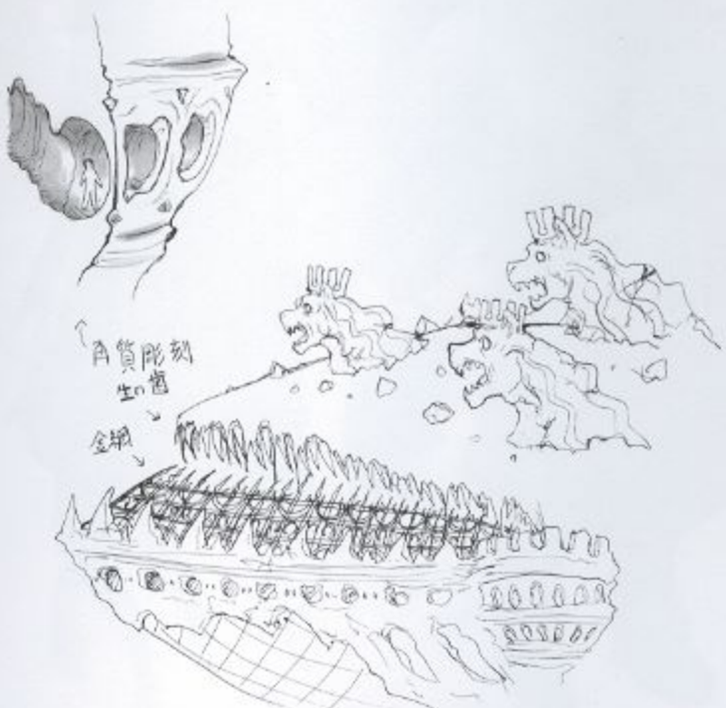
少年の姿から成長できないメレムが表にたてる代理人。色々な人間に化けるが、基本的には優しい老神父の姿をとる。
高位の悪魔祓いに見られると正体がとけ、もとの姿に戻ってしまう。
誤解なきよう注釈すると、どのような人間にも化けられる能力は“左手”のものであってメレムのものではない。メレムが創りあげたのは人化自在の存在であって、それを実行するのはあくまで“左手”。メレム本人が大人になりたい、手足が欲しい、と望んだところで変身はできないのだ。
また、四大魔獣はメレムの手足とされているが、実際は四大魔獣たちがそれぞれメレムに手足を与えているにすぎない。
メレムが消えても四大魔獣たちは破壊されるまで消えないが、四大魔獣が消えればメレムは手足を失ってしまい、その度に彼らを再想しなくてはならない。
四大魔獣たちにとってメレムは想造主だが、絶対に必要なものではない。ただ、自身が破壊されてもメレムがいる限り再想されるので、恩義らしき忠誠心は持ち合わせているようだ。

Explanation 03

右腕の悪魔

クラス：陸の王者。
ユーザー願望：神罰、大海嘯の具現。
デザイン参考：聖堂を飾っていた動物たちの彫像や剥製、または聖堂自体。

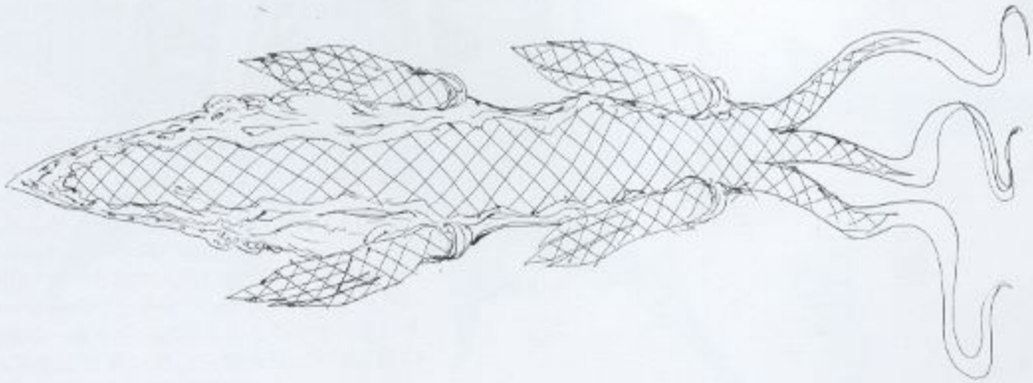
破壊の黒犬。終末の鐘。神の獣。鯨犬。
メレムが好んで引き連れる、制圧・破壊専用の悪魔。
これといった特殊能力はないが、全長２００メートル近い巨体だけで十分すぎるほど“悪魔”として成立する。
本当はもっとカワイイ犬の姿にしたかったらしいのだが、メレムの画力は妙に偏っているようだ。
“足”たる魔獣たちには人間的な知性はなく、メレムの命じるままに行進する。メレムは犬好きなのか、“左足”よりはこちらの“右足”の方が言うことを聞いてくれるようだ。

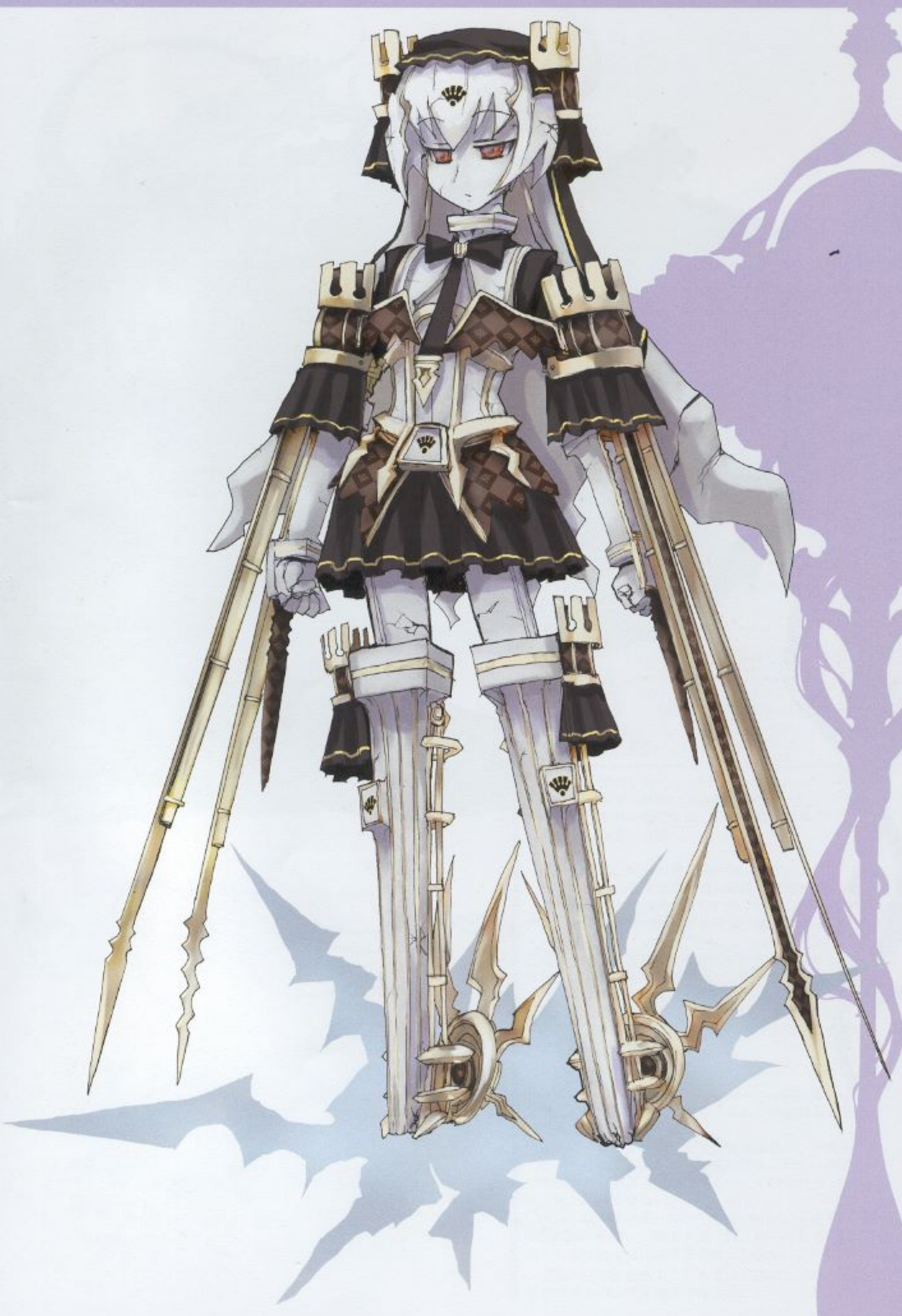


Explanation 04

覚書

他の悪魔同様、四大魔獣もメレムとは独立した生き物である。
彼らはメレムが想像した架空の悪魔だが、一度描き上げられた像はメレムから一人歩きをしだす。想造主であるメレムの言うことは聞くが、その在り方・信念まで操る事はできない。
人間、頭の中で思い描いている分にはいくらでも手を加えられるが、一度カタチ（像、絵）にして世に出してしまったモノには手を加えられない、という事。
そう。いかに想造主（さくしゅ）といえど、世に出してしまえば、手元に残るのは所有権だけなのだ。





Explanation 05

右腕の悪魔

クラス：機巧令嬢。
ユーザー願望：銃剣、戦争の具現……を建前にした人形萌えの具現。もしくは、天使を騙る悪魔。
デザイン参考：聖堂の女神像、葬式。

巨大ガラクタ擬人化少女ソードちゃん。
全長１０メートル前後のリビングギアスタチュー。
四大魔獣の中で唯一、積極的にモデルチェンジを行うオシャレさん。基本的にはダウナー系の、やる気のない女神像さまである。
通常はマスクで顔を隠している。滅多なことでは取りません。移動聖堂でもあり、腹部にはちゃっかり踏段と入り口が。
偶像なので最低限の知性しか持っておらず、あまり融通がきかない。例えるならファミリーベーシック並の演算能力。命令されたコマンドを中々デリートできない困ったさん。まるで停止ボタンを押したのに印刷を止めないプリンタのようだ！
武器を象徴する悪魔だが、原則として“個人が所有できる武装”に限られる。兵器の発展と共にデザインは細かく変化していったが、百年ほど前からこの形状に落ち着いている模様。

Explanation 06

覚書

メレムが出し渋っているのか、滅多に現れない四大魔獣。ウルトラセブンで言うのならウインダム。人気があるのに出番は少ないというキャラ立て。
余談ではあるが、初期段階ではＶ２ロケットの擬人化として考えられていた機巧魔獣。
対象に射出、命中と共に人型に変形して切り刻む、というロケット弾的インテリジェンスソードだったのだが、悪魔なら一体ぐらいは擬人化しないと、という事からこの芸風に変更。あと、個人的にPFALZ氏のメカ少女が見たかったのは内緒です。

Explanation 07

左足の悪魔

クラス：空の王者。
ユーザー願望：放浪、解放の具現。星を目指すもの。
デザイン参考：聖堂の床の模様。鳥の話。

あらゆる動物たちの集合体。空を泳ぐ獣の王さま。“右足”と同規模の巨大な悪魔。タイル状の皮膚には様々な動物たちが収納されている。空中要塞といった趣きだが、空を行くものの宿命か、その翼が地上に触れると消滅してしまう。

メレムの想像した悪魔たちの中でもっとも美しい。“右足”は殲滅戦に特化しているが、こちらは超級の敵との一騎討ちに特化している。……まあ、たいていは致命傷を与えた後に落下し、霧散してしまうのだが。

メレム的にはコストが高すぎる兵器という扱い。

Explanation 08

覚書

四大魔獣――メレム・ソロモンは奇異な色彩を誇る二十七祖たちの中でも更に一段際だつ“異物”として扱われる。

精巧に描かれた風景画に、アニメ調のキャラクターが付け足されるような感覚だろうか。

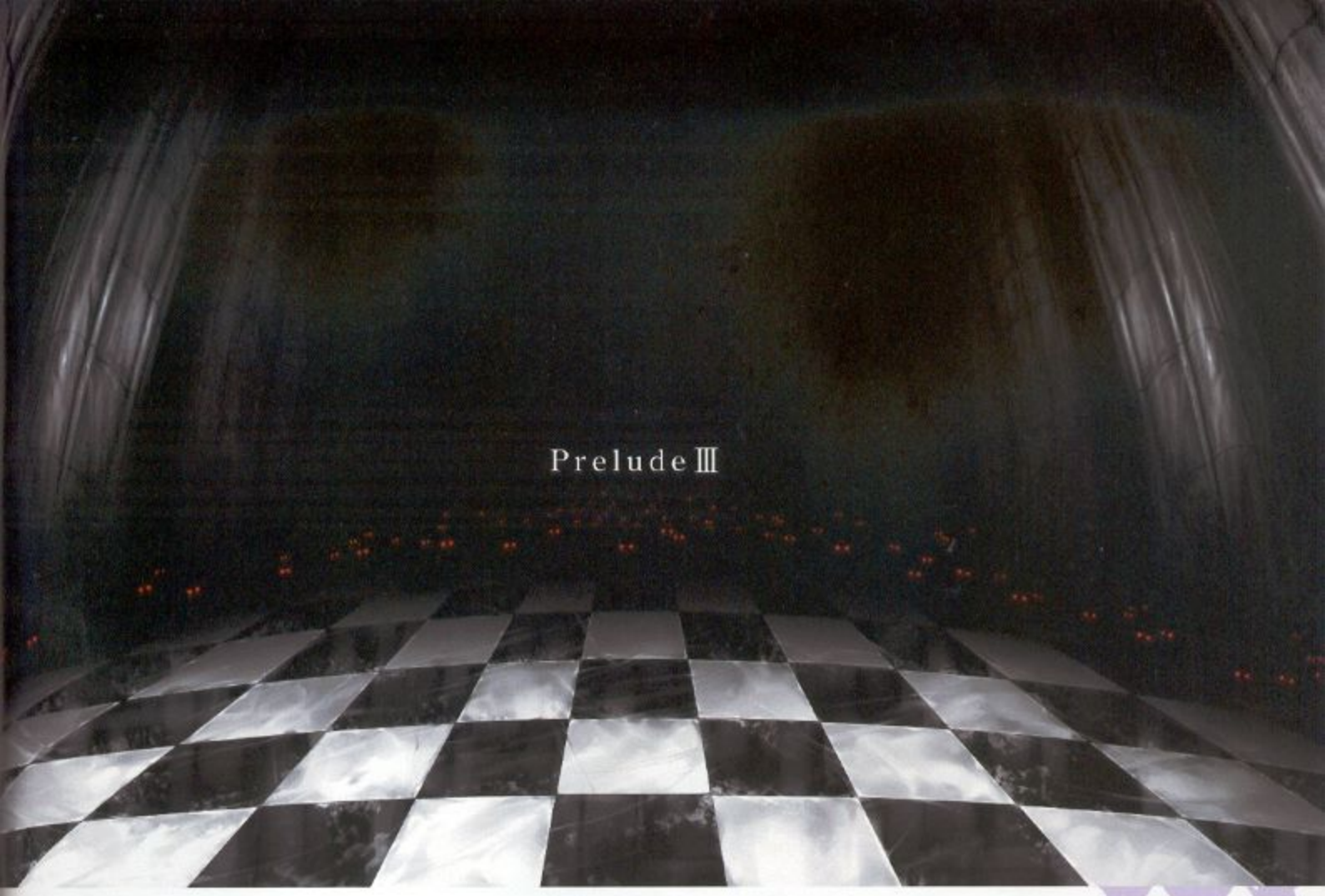
固有結界は個人の心象が現実を塗り替えるものだが、メレムの四大魔獣は人々が棄てた童話の世界からの、現実への報復なのかもしれない。

四大魔獣はメレムという子供のラクガキがカタチになったモノ。故に、彼らが現れると風景は極端にリアリティを欠いてしまう。

そのアンバランスをだす為、四大魔獣のデザインはまったく違う世界観を持つゴチック絵師・PFALZ氏にお願いした。

……その成果は語るまでもないだろう。街中に没した“右足”である巨大な獣の背中。獅子の影像たちならぶ黒色の草原でぶつかり合う、二人の主人公の姿を、著者はたしかに夢想した。つーか書きたい。

エーイッ!



Prelude Ⅲ

狭い聖堂だった。
陽射しの恩恵もなく、油の匂いもなく、人の気配もない。
集まり、声をあげるのは友人であるネズミたち。
聖堂のただ中、かつて養虫のようだった自身が吊られていたあたりで、司祭はお喋りに耳を傾ける。

「一時的な協定は結ぶけど共同戦線は張らない……？　呆れたね。死徒殲滅が第一だけど、本音は自分たち以外はみんな敵ってコトか。
……まったく。吸血鬼退治が本題であり大義だったのに、今じゃそんなのは消化試合扱いで、本当に殺したい相手は別なんだもんなあ。いつまでたっても他人の血が好きなんだね、人間っていうヤツは」

やれやれ、と司祭は肩をすくめる。
純白の法衣に金の刺繍をほどこした、決して表に出る事のない特別な信徒の姿。
その豪奢を纏うのはまだ幼い少年であり、その高説を賜るのは人語を解さぬ獣たちだ。

「ご苦労さま、右手によろしく。しばらくは局長のご機嫌とっておいてって。できるだけ仕事を押しつけて、手を空かせないようにね。なにしろあの人好みの殺し合いだ、隙あれば参戦しかねない。そうなったら泥仕合どころの話じゃない。いまどき殲滅戦なんて疲れるだけで、見せ物としちゃあ三流だ」

こくこくと頷くネズミたち。
その何匹かは彼らのアイドルの下へ走っていく。
司祭と右手は固い絆で結ばれているにしても、意見の交換は彼らなくして行えないのだ。
そうして、残った友人たちは司祭を気遣うように声を潜め、毛という毛を強ばらせた。

Explanation

／聖堂【用語】

それが、かつて幽閉されていた世界。
牢獄であると同時に心地よい胎盤でもあるのか。自由になった後も、それは外の世界を傍観し続ける。
かつてそれが想像した数多の“扉”は、この聖堂にあるものをモチーフにして生み出された。
それが憧れ、恋した唯一の外界は朱色の月のみであり、以後、月をモチーフにした想像はタブーとされた。

沈みゆく船から逃げ出す時のように。たったいま感じ取った、死の気配を警戒して。

「……ああ、ありがとうみんな。でも心配はいらないよ。古い友人だ、口上もなしで襲いかかってくる事はないさ」

ネズミたちに語りかける。

聖堂の上には、バサリと、一際大きな鳥の羽音が舞い降りる。

「やあ、久しぶり。例の話をしに来たんだろう？　聖堂教会と魔術協会、君はどちらが優勢だと思う？　ああ、ボクたちっていう答えはなしだ。そんな分かりきったコト、言うまでもないからね」

天井を見上げる事もなく、司祭は千年来の友人に話しかける。

この絶壁の聖堂に如何なる知識、如何なる方法で訪れたかは問うまでもない。

羽音の主は司祭と同じく祖に連なるモノ。

此処がどのような魔境秘境であろうと、隣人を訪ねる事と大差はないのだから。

「君は魔術師側と見るのか。ま、あの町は時計塔のお膝元だし、戦力の補充に関しては優位だけど――へえ。あのバルトメロイがわざわざ。それは驚きだな。フリーランスにも声をかけてるだろうし、始まっちゃえば魔法使いもやってくるだろう。……たしかに、その面子に比べれば教会側は戦力不足かな」

アルズベリ・バレステイン。

何十年も前から進められてきた大儀式。

魔術協会も聖堂教会も知っていながら傍観し、かつ、あわよくば旨みを独占しようと監視しあう、ちょっとした聖地となった土地（ウンス）。

その平穏もあと少しで消え去ろうとしている。

「けど、代行者など問題ではない、は驕りすぎたよ。

場所が場所だ。あの人たち、あの国なら相手がなんであろうと手は止めないよ？　死徒も魔術師も、善良なプロテスタントも見境なしだ。ほら、君もボクも、生き血がなくなったらわりと困るんじゃない？　昔から長丁場には兵糧責めって言うし。そのあたり、あっちのトリ頭は分かってるのかな」

確かに魔術協会の戦力は聖堂教会を凌駕している。

だが死徒にとって、教会の代行者こそあらゆる面で難敵だ。

極論ではあるが、魔術師は彼らと同類。神秘への在り方が同じであるのなら、純度の高い彼らの優位は揺るがない。彼らにとって脅威となるのは神意を語る人間である。

となると当然、教会の勢力など魔術師との殺し合いで早々に退場してもらいたいのだが、そう都合良くはいくまい。

事は三すくみとまではいかないが、微妙なバランスで成り立つ膠着状態と言える。

――その渦中に。

全ての勢力にとって敵でしかない姫の到来を、司祭は心待ちにしていた。

司祭にとって、主役と呼べるは黄金の姫君のみ。

それ以外のモノなぞいかな強者と言え譲えるに値しない。

それは羽音の主とて同じこと。

司祭は祖の中でも裏切り者として扱われている。本来、教会側についた彼を同格と見る祖はいない。

だが――

「あれ、なにさ、白翼の肩を持つの？　今回のはあいつの功績だって？　ハ、冗談。あいつにあんなシャレのきいたお膳立てができるもんか。あいつの頭じゃ村を死者まみれにして、すぐに教会に取りつぶされていたよ。アルズベリの仕込みは純粋に、死徒の力を用いずに人間社会に地位を築いたヴァンの仕事だ。……まったく。あいつもさ、白翼は古いとかいって離反した

Explanation ／白翼公【人名・死徒】

トラフィム・オーテンロッゼ。

最古参の死徒。二十七祖の一人。17位。

魔術師から吸血種になったもの、朱い月の最初の従者、とも。

典型的な吸血鬼で、現・死徒の王。二十七祖を代表する死徒で、形式上だけなら最大の発言力を持つ。

戯れに真祖狩りを提案した死徒であり、ネロ・カオスが極東の地で果てた原因を作った男。

古き君臨者である真祖たちを嫌い、唯一にして絶対の真祖・ブリュンスタッドに敬意を現しているのだが――

のに、なんで今さら仲良くなるのかなー。わかんないなー。あいつの本社とか食べちゃいたいなー。え？　なに、二人とも仲は最悪のまま？

……ふーん。なんだ、ヴァンのやつ出資しただけなんだ。最近はカジノ船にかまけて放蕩してる？　それは結構。ここのところ妙に堅物だったけど、昔の自堕落さが戻ってきたな」

くすくすと司祭は笑う。

ヴァン＝フェム。二十七祖の中でも変わり者なその死徒を、司祭はいたく気に入っている。

彼は新しく、賢く、引き際を心得ている。

そんな、いつまでも鮮度のいい死徒がカビの生えた儀式に執着する事を、司祭は心苦しく思っていたのだ。

なにしろ、彼とはもうしばらく仲良しでありたい。儀式を破壊する側のモノとして、彼が本腰でないのは喜ばしい。

「けど、そうなると主催は白翼だけなんだね。あいつ、頭悪いしなぁ……そんなんじゃ今回は」

万が一にも、うまくいってしまうかもしれない。

白翼は死徒の王を気取る祖だが、事実、それだけの勢力を持ち、さらに質の悪い事に、それだけの力を持っている。

頭は悪いが無能でないのが困りもの。

そんな男が第六の内容、その真価をまるっきり曲解している、というのも、司祭にとっては悩みの種だ。

「ね、誰が呼ばれているか聞いてる？　白翼の事だから子飼いの死徒を連れてくるだろう。最近じゃルヴァレあたりか。え、とっくに滅ぼされた？　それは良かった。三つ子なんて趣味悪いからね。

にしても先月か――予想より早いなもう少し手こずると思ったんだけど……これは些か、評価を改めないといけないな」

ともあれ、刻限は近い。

招集される祖は少なくとも六鬼。

第六は死徒たちにとっての悲願だ。それを取り仕切る白翼から召喚状が来ては、いかなる祖も無視できまい。

……少し、十位だった祖に同情する。

どうせ命を終えるなら、あんな戯れから生まれた戯れなどではなく、本当の戯れで消え去れば良かったのに。

「……まあ、魔術師あがりである彼に招集はかからなかっただろうけど。原液持ちは限られている。最も古い死徒なんて言ってるけど、その中でも本物は一握り。

となると――もちろん、君にも招待状は来ているだろう、グランスルグ・ブラックモア？」

羽音は静かに。

その名で呼ばれる事を不快げに、一度だけ羽ばたいた。

『そういう貴君は。参列に同意をしたのかね』

聖堂に張りのいい男性の声が響く。

「するよ。ただし教会側としてだ。局長からの勅命だし、そのその方が戦力的に面白い　……ああ。ようやく敵同士だね黒翼公。一度、君とは本気で戦ってみたかったんだ。だってほら。空の王さまが二つもいるのは、色々とややこしいでしょ？」

親愛と殺意のまじった微笑。

割合は親愛の方が強い。少年司祭はわずかな殺意と、同胞としての大きな親しみを羽音の主に持っている。

それを、

『――そうか。やはり、貴君とは気が合わない。

一度だけと言わず。私は常に、君を八つ裂きにしたかった』

黒鳥は、押し殺した、完全な殺意で吐き返した。

Explanation ／ヴァン＝フェム【人名・死徒】

ヴァレリー・フェルナンド・ヴァンデルシュターム。

二十七祖の一人。１４位。財界の魔王。人形師。七大ゴーレム「城」を創りあげる。

人間社会に関心を持ち、第一次大戦後から吸血手段を用いず勢力図を増やしていく、という試みを始めた変わり者。

この頃はセレブの町・モナコにビルを構え、週に一度はカジノ船で人々の挑戦を受けているのだとか。

「そうなの？　でもヘンな話じゃない？　それならすぐに始めればいいのに。どうして千年近く我慢してたんだ、君は」
『私闘はしない。私の闘争理由は、唯一、朱い月の御為のみ』
ああ、と司祭は懐かしそうに、嬉しそうに頷く。
それが彼らの共通点。
共に忠誠を誓ったのは唯一人。その在り方の前には、死徒としての在り方など塵芥。彼らにとって、それは神聖不可侵にして、決して汚してはならない信念だ。
羽音の主は闘争を好まない。
彼が戦場を生み出すとしたら、〝主〟の教えを忘れた死徒を正す時か、〝主〟の願いに添う時のみ。
故に、どれだけ憎くても四大の悪魔とは戦わず。
この年、この月。
〝主〟の定めた儀式に参加する事で、ようやく、理由を問わずに祖との殺し合いができるのだ。

「……まだ覚えていたんだ、トリ頭のクセに。いや、君も古いね、どうも」

罵る声には親愛だけがあった。
司祭はその一点だけで、羽音の主を生涯の友と感じている。
忠誠の在り方は違えど、お互い身を捧げた者は同じ。ならば、なぜ憎む事ができようか、と。

「アルズベリには紛い物もやってくるだろう。僕らが主とするブリュンスタッドは金の姫だけだ。それは分かっているだろう？」
『……心得ている。その件に関しては、貴君と志は同じだ』
「それは良かった。うん、いずれ戦うとしても君がいてくれるのは心強いよグラン。ボク一人じゃあいつの護衛と相討ちがいいところだ。死徒殺しの君がいるなら、今度こそ――」

司祭の大切な姫から美しい髪を奪った、あの黒血の月蝕姫を討ち滅ぼせる。

「それじゃあ、また。
百年ぶりの再会を楽しみにしているよ、烏の王」

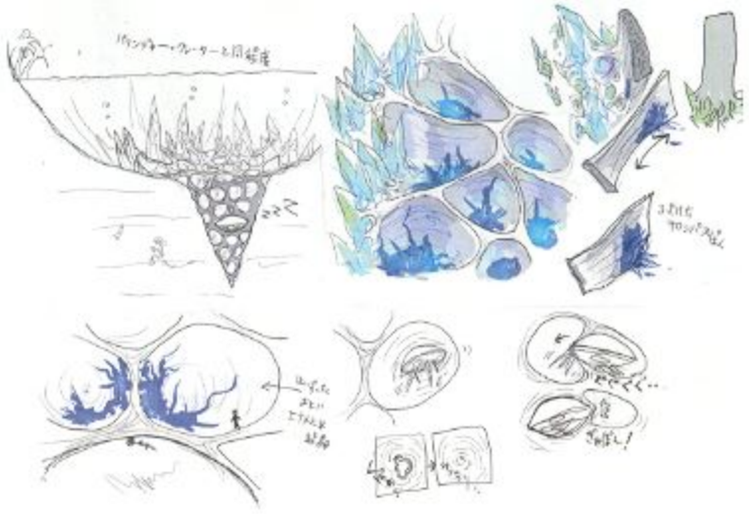
司祭は満足げに、黒烏は冷めた羽ばたきを響かせて飛び立っていく。……ここに、一つの結末が生まれた事を司祭は知らない。その無邪気さ故に気付かない。
羽音の主にとって、同じ主を抱くからこそ、少年の恋慕を交えた忠誠こそ最も度し難い罪なのだという事を。その相容れない忠誠のカタチを、彼はいずれ思い知る事になる。

――その最期に。
不滅と謳われた悪魔たちがことごとく消え去った後。
主に出会う前の、夢を見るだけだった、ただの〝物〟に還った間際――

Explanation

／姫君【名称・俗称】

金色大好き、黒いの苦手。
司祭が口にする姫君、とは言うまでもなくあの人のこと。このお子さまは口を開けば彼女のコトばっかりである。まったく成長していない。
一方、姫様は相変わらず司祭が苦手で、彼の友愛はものの見事に空ぶっている。反面、黒い方の姫さまは司祭が気に入っていて、好きあらば食べようとしているとかいないとか。



Introduction

ＯＲＴ（オルト）

詳細不明。西暦より以前に、南米に落ちた突然変異種、らしい。

攻性生物として次元違いの能力を誇る。無謀にも前五位の祖が捕獲を試み、秒殺された。

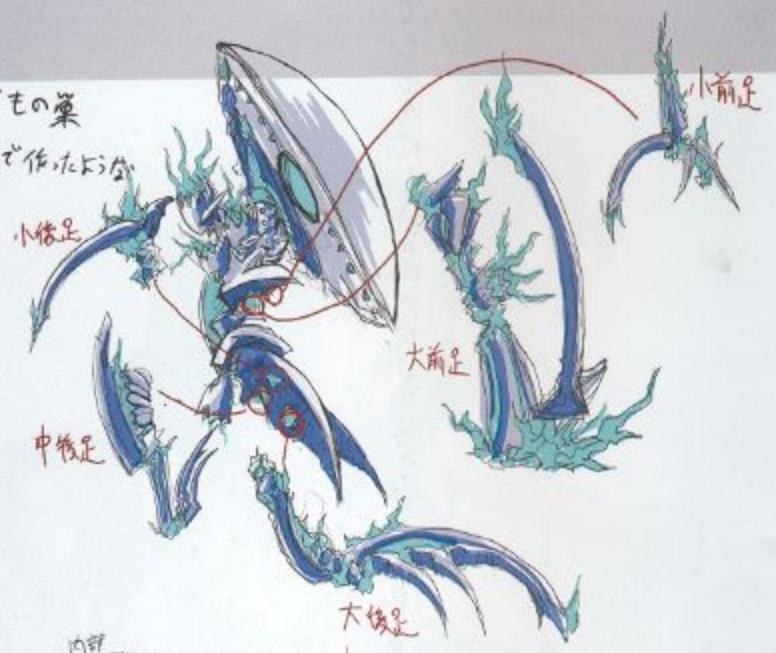
その後、吸血種としての能力があると判明しそのまま祖として扱われている。タイプ・マアキュリー。

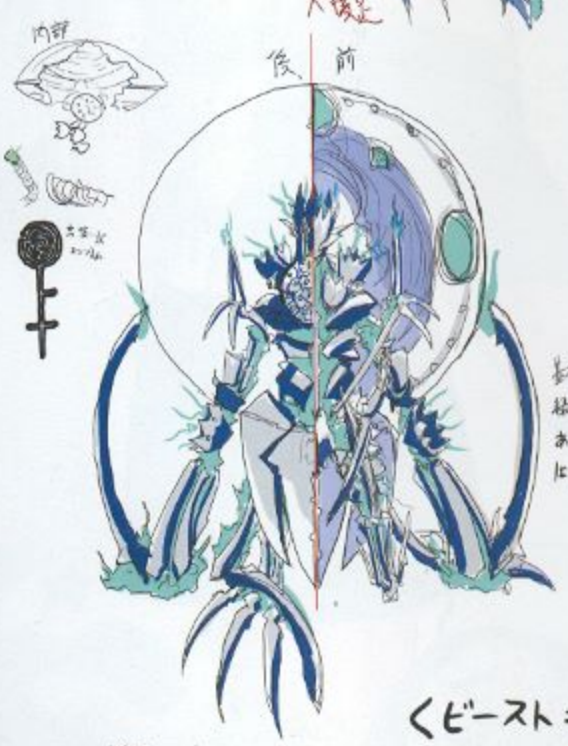
全長４０メートルほどの宇宙生物。

この地上のいかなる材質より硬く、柔らかで、気温差に耐え、鋭い、というトンデモ外皮で覆われている。

地球で戦うかぎり弱点はない、とされる。

本体のデタラメな攻撃数値の他に、固有結界に似た特殊能力・水晶渓谷を持つ。





Explanation

水晶渓谷

それはおぞましくも美しい、異星風景の侵略。
一部の魔術師や二十七祖が『固有結界』と呼ばれる心象世界を操るが、ＯＲＴの持つソレはレベルが違う。
ＯＲＴは『異星からの来訪者』だ。
彼（？）が居るだけで地球は彼の住んでいた環境に変化していく。ようするに物理法則の改竄、“異界秩序”のだだ漏れなのである。
人間が地球を滅ぼす種なら、ＯＲＴは文字通り地球を異星に塗り替える“侵略者（インヴェイダー）”なのだ。
まあ、幸いＯＲＴはぐうたら蜘蛛さんなので、地球を傷つける気はないようだが。……や、侵略行為に興味がないのかもしれない。
タイムスケジュールを間違えてやって来てしまった彼（？）は、約束の時まで水晶渓谷に閉じこもっていると思われる。
しかしそんなＯＲＴの事情は人間に分かる筈もなく、いろんな機関のお偉いさんはこんな危険生物は一刻も早くどうにかしないと、とちょっかいを出しては返り討ちになるのであった。

Explanation 02

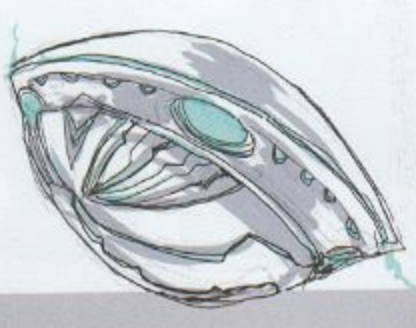
覚書

基本コンセプトは”どうしようもない絶望”。
ＲＰＧで言うならラスボスより強い隠しボス。何これゲームバランス考えてないでしょ、いえいえそんなのに手を出した貴方が悪いのです。
ＯＲＴはどうあっても地球の文化を学習できないが、捕食した生物を一部擬態する能力はあると思われる。（擬態なので仮に“人間らしい物言い”をしたところでリピート行為にすぎない。そこにロマンを求めるのは個人の勝手だが、さて）
ちなみにＯＲＴ的に今まで一番味の濃かった地球の生物が前五位の二十七祖。
余談ですがＯＲＴが移動するだけで木々は結晶化し、クリスタルの渓谷になる……という初期ヴィジュアルイメージだったのだが、PFALZ氏の“蜘蛛の巣にみたてた水晶渓谷”のアイディアが素晴らしく、そちらを採用させていただいた。
余談だが、PFALZ氏にお願いしたデザインの数々はこの本に載せられた情報を元に、氏が面白おかしく編み上げてくれたもの。か、敵わねぇー！　まさに未確認飛行物体。まさに最強の攻性生物。まさに別次元の素敵デザイン。つーかこんなのアルクでも勝てないよ！　だ、誰かウルトラ○ン連れてきてー！

Source

出典／？？？

水星（？）のアルテミット・ワン。
ＳＦ短編「notes.」で登場するアルテミット・ワンたちのお仲間……なのだが、何を間違ったか一足先（五千年ぐらい）に地球に到着してしまったドジっ子。
……実は、地球が発信したＳＯＳサインを受け取る最強種ではなかったりする。
ちなみに直死の魔眼ではコイツは殺せません。死の概念がないので物理的に破壊するしかないのである。



Introduction

有間都古

三咲町の市立高校に通う、ごくフツーの学生。
子供の頃から趣味で続けてきた拳法がちょっとだけ特別。空を飛んだりビームを撃ったりはできません。
都古本人もよく覚えていないのだが、幼い頃にいなくなった『お兄ちゃん』をなんとなく探している。
女の子というより男の子な嗜好、外見で、男子に混じってスポーツに夢中になっている模様。
女の子っぽくないのは“お兄ちゃんは悪い魔女に連れて行かれたんだ”と覚えている為らしい。
それがトラウマになって、いまいち恋話に関心が持てないご様子。
スポーツ全般得意なのだが、有り余る才能とガッツをスーパー合気道部で浪費している。
中学からは裏の空き地に棲んでいるパンダに弟子入りしているとかなんとか。

Explanation

つまり、それから四年後のお話

さわやか少女漫画の主人公から、唐突に萌えコメ魔法少女物のヒロインにされるサクリファイス第二号。（一号はカレイドでルビーなあの人）
下校中に二人の魔法少女の戦いに巻き込まれ、あまりのウザさに崩拳を一発くれて撃退。
今まで負け知らずだった不思議系魔法少女と軍事系魔法少女は都古の強さに驚愕し、
「し、新ジャンルの魔法少女――――！」
などと勝手に認認。
以後、『属性（ジャンル）／一撃必殺』系の魔法少女に登録されてしまう。
……激化する（はた迷惑な）戦いの中、もはやここまでな都古の危機を救ったのは合気道部部長だった。
天地を揺るがすファンタズムーン・エクリプスの真祖玉を、なにやら素敵な光線ではじき返す部長。
まさか、部長も人騒がせな魔法少女だったのか!?
だが部長はトンデモナイと否定するのであった。
「違いましてよ有間さん。貴女、スーパー合気道部をなんだと思っていたのかしら？」
「え……他の合気道部よりすごい合気道部って事、だよね？」
「あり得ない程にノン！　正解は“スーパー合気道”の部活ですのよ！　スーパー合気道なんですから、手から波動拳ぐらい出るに決まっているでしょう！」
「そ、それ合気道違うよ――――――っ！！！！」
うむ、もう手の施しようがないほどベタな話なのであった。

master PANDA

Explanation 02

パンダ師匠

人間大の、どう見ても着ぐるみの怪しい人。
背中に七つ夜と刺繍が入っている。パンダでぬいぐるみのクセに、きびきびとしたアクション。
ちなみに扱う武術は中国拳法ではなくごくフツーの暗殺術。都古の拳法もデタラメはっきょくけんなので、組み手には丁度いい。
愛らしくも無口、いつも気だるげかつ皮肉屋な殺人鬼。しかしパンダなのでナイフが持てないのであった。
パンダ師匠曰く、オレは灯油の入っていないストーブのようなものなんだ。

Source

出典／月姫、MELTY BLOOD

スピンアウトネタ。TYPE-MOONにおいて怪しげな『もしも』ネタは全て一纏めにされている。
ＣＣＶ、ファンタズムーン、マジカルアンバー、カレイドルビー、洗脳探偵、風雲イリヤ城等々、やばい連中が入り乱れる、ワールドエンド・ミキシングジューサーとでも言うべきか。
そんな中での都古の立ち位置がこんな感じ。
魔法少女の基本スキル・奇想設定（ファンタジスト）を無視してダメージを与えられる、世界に“正しい”設定のマジカルチャイナガール。
ま、チャイナ関係ないけどネ！

Rough

Comment

奈須：おまけのラフ設定のコーナーです。最後だし、いつもどーりの対談形式でゆるゆる進行したい所存。

武内：雑々としたデザインを幾つか集めてみました。一応全部Fate関連のデザインになっています。
では、端から簡単な説明をば。セイバーのメイド服。某メイド漫画風のメイド服ですね。ストイックなメイド服も好きだが、実はこういうのもいけるということに最近気が付きました。

奈須：人間の信念っつーのは変わるものですからね！　まだまだ若いってコトさ！　あと、hollowマスターアップ一ヶ月前。「このエピソード、絵がないと意味ないよね」と仰られたうちのメイド上級大将（タケウッチャー）がセイバーばかりか、他のヒロインたちのメイド服までスタッフに黙って描き上げたのはTYPE-MOON史の一つに残ると思います。

武内：マスターアップ直前という局面が、眠っていた俺のメイド力を目覚めさせてしまったようだぜ…。
さて、お次は凛。各キャラに新しい服が追加されたホロウでは凛にも新しい服装が追加される予定があったのですが、諸事情でお蔵入り。まー、色々着替えはあったし。カレイドとか制服とか。

奈須：この凛好きなんだけどなー。採用されなかったのが残念です。つーか服をまるっきり替えたらファンディスク違いますよね。あと、カレイドルビー、諸葛凛、ともにプロットには一ミクロンも書かれていないのに武内くんが勝手に描いたものだという事実は、もっと声高に広めたい。

武内：さて、お次は結構好評で嬉しい桜の魔術礼装。趣味全開のデザインです。とにかく和風（和弓？）のイメージがあったので、このようなデザインになりました。

奈須：……何事もなかったようにスルーだよ……あ、この桜が出てくるシーンの「私服で戦うライダー」を強く押したのも原画担当です。これは素直に褒めてあげたい。Gパンに目隠しのライダーさんかっ……！

武内：やはり日常服に戦闘服を少しだけ混ぜるというのは、続編ものでは王道でしょー。ブロードブリッジは、デザイン的にも最後に残ったサービス力の全部をつぎ込んだような感じでした。
で、ヴェディヴィエールはアニメ用に設定をおこしたもの。セイバーと同系統の鎧。他の円卓の騎士も基本的には同じ鎧なんですかね。量産型セイバーというか。ちなみにモードレッドは重装甲の黒セイバーというコンセプトになっております。

Comment

武内：バゼットの一番初めに描いた設定ですね。この一枚に、バゼットの全部が入っているような気が。

奈須：はい。はじめは青系でイメージされていたバゼットですが、色々あってこのカラーに。こちらからの提案として「スーツ姿のカッコイイ姐御」を発注したら、こんな素敵な萌えキャラが……！な、なにをした武内！？

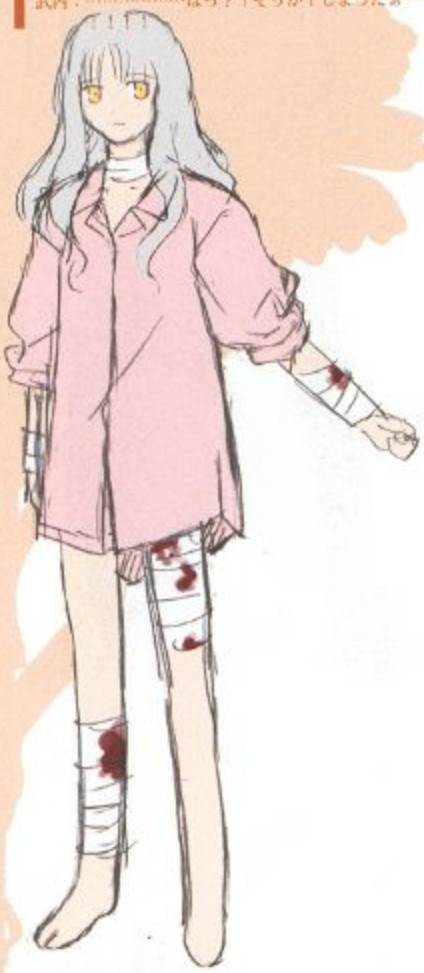
武内：男装の麗人というキャラとしては既にある種の思い入れがあったものの、スーツじゃ萌えないよにゃーとか思いつつ、川尻監督の妖獣都市完全版を見ていたら、そこに天啓が隠されておったのだわい！

奈須：ま、麻紀絵からきいていたのかっっ！？　……いま初めて聞きましたよ、それ。……しかし、そうか……あの、スーツ・ショートカット・人外の「三種の神器」を完璧にこなした麻紀絵さんから、ダメットさんが生まれようとは……鬼子だな、ホント。

武内：ひでえ言われようですな。ちなみに受けた天啓は、スーツでエロスとか、そういうのが主です。
あとは使うことの出来なかったカレンの私服。マジで使いたかったんだけど、マジで使うところがありませんでした。

奈須：んな事はない。描いてくれれば、Hシーンの後に使えたよ。つーか、当然Yシャツ立ち絵があると思ってシナリオ書いてタヨ。

武内：……はっ？！そうか！しまったぁ――――――――！



Comment

武内：子供達です。士郎12歳の、生意気そうな感じが凄く可愛いんじゃないかと思うのですが、どーなのでしょーかー。

奈須：子供士郎が可愛いのは当然として、桜の可愛さはどうなのか。ミミちゃんにも負けないぜ！

武内：桜は間桐人間に改造される前ということで、髪や目の色が遠坂人間です。まだ顔を髪で隠したりしていない頃。きっと活発な子供だったのではないかと妄想してます。くせっ毛も遠坂っぽいですね。

奈須：月日は残酷ですね、ううう……（泣）。そりゃ遠坂さんも妹萌えになります。さりげに赤い服に黒リボン、というのもきついなあ……でもまあ、その代わりに凛にはないモノを手に入れた訳ですが！（ヒント：脂肪）

武内：このままの姿で成長していたらどんな娘さんになったのでしょうなぁ。

Character designer's comment

Takashi Takeuchi

武内崇

TYPE-MOON代表。月姫、Fateシリーズではキャラクターデザイン・原画を担当。

担当キャラクター：青子・有珠・旧Fate・ローレライ・橙子・洗脳探偵・少女・ゴドー・ダウン・エルメロイ二世・モードレット・由紀香・メレム・都古・パンダ

キャラクター設定本を作りたい！設定だけあってデザインのないあのキャラとか！もう二度と目の目を見そうもないあのキャラとか！妄想だけはドンドン膨らむあのキャラとかが紹介されてるキャラ本なの！

てな感じの、いつもの思いつきで突貫してしまいました。

奈須世界の新設定なんかも色々披露されて、面白い本になってくれたかなと思います。大変でしたが、同人誌を作っているみたいで楽しかったです。

描きたかったのは高校生の都古と旧Fateのコンビ。旧Fateのコンビは、流石に元デザインまんまというわけには行かなかったので、今描くなら、という感じで再デザインしてあります。旧セイバーのデザインには、当時奈須も大好きだった菊池秀行小説の、主人公の遺伝子が組み込まれています。

いざ描いてみたら楽しかったのは、洗脳探偵、漆黒のエプロンドレス、燃える。

橙子（ヤング）のデザインは、Fate/side materialが初出だったりします。説明が無かったため気が付いて買えなかったので、ここでリベンジ。

んー、あとはぎらぎらした男臭いキャラも描きたかったなぁ。

なお、今回掲載されているデザインは、実際に使用される時には変更される可能性がありますので、そのあたりはご了承の上お楽しみ下さい（笑）

NASU KINOKO

奈須きのこ

蕎麦類代表。月姫、Fateシリーズではシナリオ担当。TYPE-MOONではゲーム担当。

担当キャラクター：全部

色々と疲れたけど有意義な作業でした。

まるっきり新規の情報とか、過去の設定の練め直しとか、月姫以降もんもんと考えていた話の形が、少しは見えてきたと思います。

日々の仕事が終わってからＣＭのテキストを書く、という実に同人誌的なやり方も、精神年齢を二三歳若返らせてくれたと思います。

……まあ、しかした。さすがに本業が切迫してきてこれ以上キャラの設定を書けないという時に

「ヒュウ、どうかねきのこ君！　はい、洗脳探偵とか描いてみた！」

と勢いだけで頁数を増やす武内くんに雑落としを食らわせてやってください藤巻さん。

また、ゲストデザイナーさんたちの原稿ラフが届けられるたびにガソリンが入って重張れる、という体験もいたしました。PFALZ氏、武梨氏に感謝を。武内とこやまさん戦友として今後ともよしろく。彩色チームのお三方、今回もいい仕事っぷりだったぜありがとう！急なスケジュールで編集をしてくれた歌星音人氏には足を向けて眠れません。そしてつくりさんはもちょっとＢ級ＤＶＤ鑑賞を控えるべし。

はい。そんな訳で、この本の三割ぐらいは、いずれ世に出る事を祈って。

PFALZ

ＰＦＡＬＺ

ハイセンスで不気味、しかも可愛らしいデザインを生み出す多次元イラストレーター。イベントではサークル「caelestis.」で活動中。http://www8.plala.or.jp/pfalz/

担当キャラクター：斬撃皇帝・ブラックモア・四大魔獣・ORT

どうもーPFALZ（ファルツ）と申しますー

今回ゲストクリーチャーデザインなどさせてもらいましたよー

TYPEMOONさんとのファーストインプレッションは月並みながら「月姫」からだったのですがその作品に羨望しつつも、むしろ作品から透けて見える、新しい事をしようとしているその「精神」にこそ強く影響されたような気がします。

それがこうしてお仕事をご一緒することになるとは…縁とはわからないものですわー。

しかし今回なかなかに奇抜なクリーチャーの指定ばかりで正直……楽しすぎましたね！

普通でなければ普通でないものほど描きやすい人なので、無フォルムで犬系とか！宇宙蜘蛛とか！…なんだこの素敵ラインナップ！とか思いましたよー。

Eri Takenashi

武梨えり

漫画家。Fate/hollow ataraxiaではミニキャラや花札の柳洞寺チームの作画もお願いさせて頂きました。アンソロジーで活躍されていましたが、現在はコミックREXでオリジナル作品「かんなぎ」を大好評連載中！

担当キャラクター：ファンタズムーン・マジカルアンバー

ファンタズムーンがなぜだかこんなとこに！

恐れ多いです。人生ってやつぁ信じられない様な事が起こるのです。

第二期っていう設定だったのでちょっとTAKEMOONバージョンをリニューアルしてあります。…ちょっとほっちゃけすぎた。あと、若奥様については…ええと、歪んだ、愛？

コハッキーはメルブラ的にきつねさんです。でもお顔はたぬき顔ですよね。やばい、可愛いかも、たぬき。

Koyama Hirokazu

こやまひろかず

TYPE-MOON所属のイラストレーター兼グラフィッカー。Fateシリーズではグラフィックチーフを担当。今後は奈須きのこの最新小説「DDD」の挿絵などイラストレーターとしても活動予定。

担当キャラクター：アリカ・カイエ・干将莫耶オーバーエッジ

干将、莫耶オーバーエッジはアニメ用に既存の設定を形にしたものですが今回はあらためてお披露目できる良い機会になりました。

DDDキャラはホントはもっと沢山なんですが、いろいろリベンジしたいので今回はメインの２人だけ。この２人がどう絡んで行くのか私も楽しみです。あと味とか！

アリカは私が描くとなぜか脳力キャラに。

カイエは「なんでオト○!?」という読者の呪詛が聞こえてくればこ私の勝ちだと思ってますw

あ、呪詛は奈須さんの方へヨロ。

Tsukurimonoji

つくりものじ

かもはうす。TYPE-MOONでは演出、スクリプトを担当。その他、イラストや漫画など、多方面で活動。Fateシリーズではコンテから画面演出まで、映像面の要となっています。気持ちの振り幅が測定不能の才人。

担当キャラクター：カレイドルビー・小学部イリヤ・セラおねえちゃん・リズおかあさん

ヤァコンニチハ！

特に言う事無いんでこないだ買ったDVDの話しようか？　ダメですか？　ですよね！

凄いんじゃよ？パッケージ嘘だらけで笑い止まらないって海洋パニック！　まぁとにかくTYPE-MOONは遊園地さ、回る回るメルィーゴゥラウンドさ！

ウフフアハハ誰か止めてーーーーーーーーーー！！！

Character material

STAFF

テキスト・総監修
奈須きのこ

見開き内表紙
MORIYA

表紙・挿絵
simo

グラフィック
蒼月誉雄
MORIYA
simo

編集
WINPANWORKS

協力
TYPE-MOON ALL STAFF

発行者
竹内友崇

制作
TYPE-MOON

印刷
株式会社　高山

2006年8月11日　初版発行

TYPE-MOON
http://www.typemoon.com/

TYPE-MOON

TYPE-MOON